モントリオールへ若い第一歩

全日本男子新陣容発表

日本協会は1月19日午後1時から東京渋谷の岸記念体育会館で緊急全国理事会（田村会長、渡辺、林、徳永3副会長、18理事出席＝成立）を開き、政情不安から成りゆきが注目されていたテルアビブでの第8回世界男子選手権アジア予選（2月14日第1戦、17日第2戦、対イスラエル）への参加について協議した。

その結果、エジプト、イスラエルの兵力引離し合意（1月18日調印）など中東和平の見通し濃厚との判断から日本代表チームの派遣を正式決定、同時に遠征メンバーも承認した。

これは各理事による延々4時間の議論の末、会長、副会長、荒川理事長の「5者会談」によって煮つめられた結論である。この決定は1月12日の月例常務理事会が「中東における安全の保証がなお充分でない」とし派遣を見合せるとした決議をくつがえすもので、万全を期すため1月下旬、田村会長は、同会長と林達夫副会長（遠征団々長）がイスラエルへおもむき、同国関係者、日本大使館などと話合うことになったと発表、各理事も了解した。

なお、常務理事会の決議〜参加辞退〜については、IHF（国際ハンドボール連盟）から再検討が強く要望され、棄権となれば、その理由いかんにかかわらず、ペナルティーが科せられるだろうとの警告もあり、日本協会はかつてない〝危機〟に立たされていた。

新・全日本は24名でこのうち12名が遠征、残りは「全日本B」（3頁参照）とされた。

遠征メンバーのうちミュンヘンオリンピック経験者はわずかに本田・中井の二人を残すだけ、男子ナショナルでは初のティーンエイジャー・蒲生をはじめ全日本ジュニアから6人が昇格するという若さにあふれた陣容である。

新鮮さを打ち出した一方、目前のアジア予選を勝ち抜くため、国際キャリアのある藤中、大江、花輪、佐藤ら中堅クラスを加えた。

監督は昨夏すでに北川勇喜氏（38才、日体大男子監督、日体大出）が決まっており、コーチには木野実氏（27才、湧永薬品、FP、立教大出）が登用された。

イスラエルには2月上旬向かう予定である。

世界選手権アジア予選代表

	氏名	年齢	所属
▽GK	本田　洋	(26)	大阪イーグルス
	柳川　清	(22)	大同製鋼
▽FP	藤中　憲二	(26)	大同製鋼
	佐藤　要二	(24)	本田技研鈴鹿
	中井　武三	(24)	大同製鋼
	大江　隆夫	(24)	三菱レ大竹
	花輪　博	(23)	大同製鋼
	夏目　真治	(22)	中京大
	菊池　悟	(21)	早稲田大
	村田　幸男	(20)	法政大
	柳川　実	(20)	大同製鋼
	蒲生　晴明	(19)	中央大

全日本女子、10位にとどまる

世界選手権

第5回世界女子選手権は、昨年12月8日から14日までユーゴスラビアの首都ベオグラードを主会場にして華々しく開かれ、アジア代表・日本は、またしてもヨーロッパの壁にはね返され参加12ケ国の第10位に終った。

◇

4度目の出場をはたす日本（田村正衛団長ら役員3、選手12人）は、前哨戦のオランダ国際トーナメント（11月23〜25日）でみごとに優勝するなど元気いっぱい、自信をもっての乗りこみだったが、予選リーグB組での緒戦・ルーマニア戦で強引なルーマニアの攻撃をかわし切れず12—24で敗れた。

つづくノルウェー戦はオランダ国際で14—12と勝った相手だけに、有利とみられたが、ノルウェーは、開幕前夜急きょエントリーに加えた往年のエース、K・フラセットを中心とした攻撃でたえず先行、日本は後半開始直後6—6といちどはタイに追いついたが、そのあと連続7ゴールを奪われて敗退、ベストエイトからさらに5〜6位を狙おうという野望をくじかれてしまった。

9〜12位決定リーグに廻った日本はオランダに15—11で制勝、東ドイツ（前回優勝国）とは激しい攻防のやりとりの末12—17で惜敗、西ドイツとの最終戦は13—10で快勝した。

10位に留ったとは云え大会後半にみせた日本の実力は、上位国にヒケをとらぬものであり、モントリオールオリンピックへの希望を明るくしたものといえよう。

なお、優勝戦は地元ユーゴと2度目の栄冠を狙うルーマニアが激闘を演じ、ユーゴが後半一気に勝負を決め16—11で勝ち、男子（ミュンヘンオリンピック優勝、昨秋来日）とともに、世界一の座につく快挙をとげた（関連記事6頁）

「ハンドボール」49年2月号（第116号）目次

【表紙写真】第25回全日本総合男子の優勝をかけた大同製鋼×湧永薬品戦。大同・藤中の攻撃を懸命に防ぐ湧永ディフェンス（12月16日東京体育館　撮影・山田真市）

新しい長期計画へ踏み出す

新全日本の背景

ミュンヘン以後、ユーゴ戦を行っただけで鳴りをひそめていた日本協会の男子頂点強化対策が再び活動、1頁所報のとおり、世界選手権アジア予選代表12名を決めたほか新制度・全日本B12名も決定。この24名を軸にモントリオールオリンピックへ向けて新たなステップが踏みだされた。

ミュンヘン・オリンピック代表のうち新・全日本へ残したのは本田（大阪イーグルス、GK）、中井（大同製鋼、FP）の二人だけ。実に思い切ったメンバーの切り替えである。（注・ほかに今回は木野が選手登録）

昨秋11月11日の全国理事会でこの構想を荒川理事長が初めて公けにした時、出席した理事からは二、三の質問が出たにとどまり、強い反対がなかった。

ミュンヘン大会の結果、さらにはユーゴの来日で改めてヨーロッパ一流国とわが国との「差」が痛感させられ、ちょっとやそっとの強化では世界の上位へ進出できないことを誰もが再認識したからであろう。

飯田、野田、近森ら姿消す

新しい長期計画を採ろう—今回発表された全日本は、この方針の最初の着手である。

そのために、飯田（大崎電気）、野田（大同製鋼）、早川（大阪イーグルス）、近森、下里（ともに元大崎電気）ら、近年のハンドボール熱上昇の立役者たちがそのリストから消えた。

彼らは、ベテランとは云え国内最高水準の技倆を誇っている現役だ。その力と技を惜しむ声が起きるであろうし、新全日本のキャリアに不安が生じることもあるかもしれない。しかし、あえて、将来性に富んだ若手を中心に選手選考した日本協会（選考委員会）の腹の内は、今後とも新陳代謝を最善かつ円滑にするための布石にする狙いがあったからだ。

今回の選考方針は〝英断〟だとされている。だが荒川理事長は「このような〝交替〟が英断であってはならない。ごく当然の流れという意識が育ってこそ、日本は世界の最上位を狙うことができる」という。

A—B間の入れ替えも

全日本B（3頁参照）という新システムも日本協会の、将来への意欲のあらわれの一つである。

世界選手権（アジア予選）帰国後、代表選手の再評価を行いBとの入れ替えを行う予定もすでに建てられている。

「49年度ナショナル」がモントリオール・オリンピックへの第一次候補選手となることは、来年にせまったアジア予選までの時間を考えれば必至であり、日本協会の男子頂点強化対策はミュンヘン後の沈黙を一気に取り返すように、にわかにその動きは意欲にみちたものとなってきた。

なお、男子監督について、1月12日の月例常務理事会で、荒川理事長は重ねて「今回の世界選手権で一区切りとする」と述べた。

ジュニアも近く新編成　寿技術部長代行は1月12日の月例常務理事会で「全日本ジュニア（男子のみ）」について今春3月までにメンバーの補充を行うと発表した。

これは、一昨年11月に発表した29名（本誌104号参照）のうち、ナショナル昇格者が13名（A6、B7）、規定の年令（満22才、昭和26年12月31日以前出生の者）に達し自動的に資格を失った者が6名、辞退者2名となり、いぜんジュニアの資格を保有している者が上村（中大）、福井（京都産大）ら8名に減ったためである。

「世界選手権予選」代表の横顔

柳川、兄弟で栄光

◇監督・北川勇喜　日体大助教授　日体大（男）監督、日体大出、38才、昭47全日本コーチ、昭48ユーゴ戦全日本監督（48年度男子ナショナル監督）

◇コーチ・木野実（FP登録）湧永薬品勤務、立大出、27才、41年9月全日本入り、ミュンヘン五輪代表、昭42第6回、昭45第7回世界選手権代表、昭44欧州遠征、公式国際試合出場41試合（155得点＝41試合連続）。1m80、76kg

◇GK・本田洋　大阪イーグルス（大阪初芝高教諭）、日体大出、26才、44年2月全日本入り、ミュンヘン五輪代表、昭45第7回世界選手権代表、昭44欧州遠征、公式国際試合出場31試合、179cm、78kg

◇GK・柳川清　大同製鋼、熊本市商出、23才、49年1月全日本入り(47年度全日本ジュニア)、176cm 70kg

◇FP・中井武三　大同製鋼、同志社大出、24才、44年2月全日本入り、ミュンヘン五輪代表、昭45第7回世界選手権代表、昭44欧州遠征、公式国際試合出場18試合（24得点）、181cm、75kg

◇FP・藤中憲二　大同製鋼、日体大出、26才、44年2月全日本入り、昭45第7回世界選手権代表、昭44欧州遠征、公式国際試合出場20試合（21点）、180cm、74kg

◇FP・佐藤要二　本田技研鈴鹿　中大出、24才、47年3月全日本入り、公式国際試合出場2試合（3得点）、180cm、78kg

◇FP・花輪博　大同製鋼、中大出、23才、45年4月全日本入り、177cm、74kg

◇FP・柳川実　大同製鋼、熊本一工高出、20才、49年1月全日本入り(47年度全日本ジュニア)、175cm、70kg。柳川清(GK)の実弟。

◇FP・大江隆夫　三菱レイヨン大竹、芝浦工大出、24才、46年7月全日本入り、公式国際試合出場7試合（5得点）、170cm、67kg

◇FP・夏目真治　中京大4年、豊橋商出、22才、48年8月全日本入り(47年度全日本ジュニア)公式国際試合出場1試合、181cm、73kg

◇FP・菊池悟　早大3年、盛岡一高出、21才、48年8月全日本入り（47年度全日本ジュニア）公式国際試合出場2試合、185cm、84kg

◇FP・村田幸男　法大2年、明星高出、20才、49年1月全日本入り（47年度全日本ジュニア）175cm 68kg

◇FP・蒲生晴明　中大1年、中大附高出、19才、48年8月全日本入り(47年度全日本ジュニア)、公式国際試合出場2試合（6得点）192cm、87kg

いちどは参加辞退決める・日本協会

□……日本協会はテルアビブに全日本を送ったものかどうか悩みつづけた。昨秋11月11日の全国評議員会・同理事会（東京＝本誌115号既報）時点では、中東状勢がまったく予断を許さないとして、派遣問題のいっさいを常務理事へ一任、荒川理事長をはじめ執行部は新聞などの報道をたよりに情勢分析をつづけて来たが明確な判断を下せるものではなかった。そこで世界女子選手権（12月、ユーゴ）に団長として参加する田村会長と、IHF（国際ハンドボール連盟）理事として現地に赴く渡辺副会長に〝日本の苦悩〟を伝え、IHFサイドでの善処を要請することになった。

□……渡辺副会長の働きかけでIHFは12月12日ベオグラードで緊急常務理事会（非公開）を開いたものの、「テルアビブでアジア予選を行う方針は変えない。ただし、2月8日を一つの期限として、その時点で中東に戦火が残っている場合、または日本－イスラエル間の外交状態に変化が起きた場合は予選会場地を第三者国に移す」ことを申し合せたにとどまった。

□……この結果、日本協会は、最終決断をせまられることになり、1月12日の月例常務理事会で、改めて田村会長からIHF筋の見解の説明をうけたあと、2時間近い協議を行い「中東戦争は実質的に終結していない。ゲリラ襲撃の危惧はぬぐいされない」の2点から遠征中止－世界選手権棄権を決議、ただちに評議員、理事、IHFへ通達、1月16日に〝棄権の公表〟を行う手ハズをととのえた。

□……ところが、15日深夜（日本時間）、渡辺副会長から連絡をうけたIHF専務理事、M・リンケンバーガー氏（西ドイツ）は、日本側に再検討することを強く要望、16日、日本協会あて「現在、中東は戦争状態ではなく、日本がイスラエルで試合を行わぬ理由はまったくない。参加辞退の場合、大きな罰則を日本協会に科すことになろう」旨の公電が届いた。17日の緊急常務理事会で渡辺副会長は「欧米人のゲリラに対する感覚は日本人とちがう。常に危険はないとみて行動している。」と説明、19日緊急全国理事会の招集（1頁）となった。

日本、楽観許さず

ところでこのアジア予選はIHF（国際ハンドボール連盟）の規定では、新春1月15日までに終了しなければならなかったがアジアの東西両極端に位置する国の対戦とあって、特に本大会直前まで期日延期が認められた。

IHF筋はこの対戦を日本有利とみて、そのまま東ドイツへ向かう便宜を日本のために企ててくれたわけなのだが、卒直のところ戦況は楽観を許さない。

なるほど、ミュンヘンオリンピック・アジア予選（46年11月、東京ほか）では、日本はイスラエルを第一戦15－4、第二戦18－7と一方的に破り、ミュンヘンでは10位、その後も金メダリストユーゴを迎え撃つなど、イスラエルをしのぐ国際実績を残してはいるが、今回は別掲のとおり、ガラリとメンバーを変え、ヨーロッパ遠征の経験者は木野（コーチ兼任）、中井、藤中、GK本田の4人だけ、キャリアがものをいう国際試合ではハンデになる懸念がある。

乗りこみの不利も重なる。審判はシルリジアヌ、シデアのルーマニア・ペアが担当するが、ヨーロッパの傾向は、微妙なところでホームチームを優位に判定する。

公平、潔べきな日本では考えられぬが、これは事実である。世界選手権の予選ともなれば、厳正だろうが、昨年のヨーロッパ地域予選でもホームゲームをキープしあったカードがいくつかあり、ボクシングにたとえるなら、ナックアウトで勝たねばダメ、ということになる。

戦力的にはいぜん優位

日本はナックアウトで勝てるだろうか。

イスラエルの戦力は、ミュンヘン予選の時とそう変わっていないのではないかという楽観説と、今回の予選を自国へ誘致するために示した執着は、自信あってのこと、ましてテルアビブの大体育館（八千人収容）で「建国25周年記念事業」の一つに組みこまれた背景を考えれば、その闘志はなみなみならぬものがあるという警戒説がある。

筆者の得ているイスラエルの動向は、昨春オランダと15－13、12－15、スイスと18－20、16－15という記録以外なく、今シーズン（昨秋9月以降）は公式国際試合なし、ヨーロッパカップ（単独チームの選手権）で、チャンピオンのハポエル・ヘルツリアが1回戦でCF・バルセロナ（スペイン）に16－32、23－29で連敗したことが判っているだけだ。

こうしたスコアをそのままウノミにすることはできないにしても急速なレベルアップを示しているとは思えない。アジア予選の時、イスラエルのメンバーには3人のティーンエイジャーと24才以下の若手が9人もおり、当然これらの選手が今回の主力となるだろう。

日本も、予選で敗退するようではモントリオール出場にマイナスの材料を国内外に露してしまうようなもの。戦力的には充分勝算あり（過去の通算成績・日本5勝1分＝7人制）と確信するだけに、〝敵〟はやはり遠征の不利をいかに克服するかだろう。

「速攻で先制、序盤から優位に立つ」という北川監督の策戦と選手の若さにあふれた気力を期待したい。（杉山）

学生界から10選手　全日本B

本誌1頁所報のとおり、日本協会は1月19日の緊急全国理事会で48年度男子ナショナルチームを24名としこのうち、次の12名を「全日本B」とすることに決めた。また、アジア予選に勝った場合、世界選手権代表は新選出せずアジア予選出場者がそのまま乗りこむ。

▽GK　柴田（法大）、斎藤（日体大）▽FP　管野、斎藤（以上日体大）、津川、穂積（以上大阪経大）、松原（大同製鋼）、田上（本田技研鈴鹿）、柳（法大）、大熊（中大）、脇若（早大）、中村（大阪体大）

Osaki

タイムスイッチ

TYシリーズ

24時間では足りないあなたに1日＝72時間

大崎タイムスイッチならそれが可能です。毎日、毎週、毎月、定時刻に自動的にスイッチを〈入・切〉するあらゆる設備機器や年間の日没・日出時刻に応じ、自動的に照明を〈入・切〉する場合に最適です。

大崎電氣工業株式會社

〒141 品川区東五反田2丁目2番7号 TEL.03 (443) 7171番

ブルガリア、アルジェリアなど勝つ

世界男子地域予選

第8回世界男子選手権の各地域予選は、昨年内に、アジア地域を除いてはすべてその日程を終了、代表国が決まった。

ノルウェー敗れる

ヨーロッパ地域（第3報）

注目のヨーロッパ（5地区）では、各グループとも激戦がつづき、実力伯仲とみられた第1群からはアイスランド、第2群からはブルガリアが勝ちあがった。

▽第1群・第2戦のうちアイスランド×イタリア、フランス×イタリアはイタリアが棄権しアイスランド、フランスの不戦勝となった。

【順位】①アイスランド3勝1敗（得失点差27）②フランス3勝1敗（10）③イタリア

▽第2群・第2戦

ポーランド　21（15－6、6－7）13　オランダ

オランダ　16（7－6、9－7）13　スイス

ポーランド　25（13－10、12－6）16　スイス

【順位】①ポーランド3勝1分②オランダ③スイス

▽第3群・第1戦つづき

ノルウェー　20（9－4、11－7）11　フィンランド

ブルガリア　16（8－6、8－6）12　ノルウェー

▽同・第2戦

ブルガリア　30（17－2、13－5）7　フィンランド

ノルウェー　20（10－3、10－7）10　フィンランド

ノルウェー　17（9－7、8－6）13　ブルガリア

【順位】①ブルガリア3勝1敗（得失点差31）②ノルウェー3勝1敗（19）③フィンランド

▽第4群・第1戦つづき

ルクセンブルグ　15（10－6、5－7）13　ベルギー

デンマーク　24（15－9、9－5）14　ルクセンブルグ

▽同・第2戦

デンマーク　32（18－6、14－5）11　ベルギー

ルクセンブルグ　19（8－7、11－9）16　ベルギー

デンマーク　26（15－6、11－5）11　ルクセンブルグ

【順位】①デンマーク4戦全勝②ルクセンブルグ③ベルギー

▽第5群・第1戦

スペイン　16（6－5、10－5）10　ポルトガル

オーストリア　15（7－7、8－4）11　ポルトガル

オーストリア　18（11－6、7－11）17　スペイン

▽同・第2戦

スペイン　14（5－2、9－7）9　ポルトガル

オーストリア　17（10－7、7－6）13　ポルトガル

スペイン　19（10－2、9－2）4　オーストリア

【順位】①スペイン3勝1敗（得失点差15）②オーストリア3勝1敗（マイナス14）③ポルトガル

アメリカ、辛くも勝つ

アメリカ地域

11月9日から3日間ヴエノスアイレスでアメリカ、ブラジル、アルゼンチンの3ケ国リーグによって行なわれ、アメリカが地元アルゼンチンに辛勝して2勝をマーク、代表となった。3日間で二万をこすファンを集め盛況だった。

アメリカ　19（9－6、10－6）12　ブラジル

アルゼンチン　24（15－6、9－9）15　ブラジル

アメリカ　19（11－6、8－11）17　アルゼンチン

チュニジアも敗退

アフリカ地域

12月7日から9日までアルジェリアに3ケ国が参加して開かれ、地元アルジェリアが勝った。

チュニジア　40（22－8、18－7）15　ギニア

アルジェリア　34（18－4、16－3）7　ギニア

アルジェリア　14（9－6、5－3）9　チュニジア

近づく世界選手権

栄冠へしのぎ削る東欧勢

第8回世界男子選手権は2月28日から3月10日まで東ドイツのベルリンなど11都市で行われる。

参加するのはミュンヘンオリンピックの上位8ケ国と、各大陸予選を勝ち進んだ8ケ国の計16ケ国。競技方式は、4ケ国ずつ4組の予選リーグのあと各組上位2国が準決勝リーグ(2組＝ベストエイト)へ進み、各組同位同士の対戦で1〜8位の決まるいつものとおりのシステムだ。

各国とも、ミュンヘン後かなりメンバーの入れ替えを行なったと伝えられ、思い切った試合ぶりを見せるだろう。アジア代表（イスラエル×日本の勝者）は東ドイツ、ソビエト、アメリカと同組。日本が出た場合、北川監督は「ソビエト、アメリカから勝利を目指す」といっている。

ベストエイトはルーマニア、スエーデン、東ドイツ、ソビエト、ユーゴ、ハンガリーと見るのが順当。残る二つはA組だがまったく予断を許さない。わずかにチェコが有利、他の三国の実力はまったく伯仲、特に西ドイツやミュンヘン13位のデンマークの巻き返し成るかは興味深い。アイスランドも軽視はできない。

このほか波乱があるとすればポーランド、ブルガリア、日本の進出であろう。

準決勝リーグは東欧勢によるすさまじい展開が予想される。

特に東ドイツ、ソビエト、ユーゴのかみあう2組は、目のこえた東ドイツのファンを熱狂させつづけるだろう。

1組ではやはりルーマニア（前回優勝国）か。この4者から、最後の栄冠を握る国を占うのは、星の数をかぞえるにも等しい難しさだ。

前哨戦の3大トーナメント、トビリシ国際ではソビエト、ベルリン国際では東ドイツ、カルパティアカップではルーマニア（いずれも詳報本誌26頁）が優勝しており、ユーゴも負傷していたラザレビッチらの戦列復帰で金メダリストの面目にかけて戦うだろう。

ヨーロッパの専門家たちは、ズバリ、東ドイツ×ルーマニア、ユーゴ戦の勝者が決勝を争うとみているようだが、そこまでいく間に一波乱、二波乱は必至である。

この大会が終れば、もう来年はモントリオールオリンピックの予選、そしてモントリオールとつづいているのだ。

グローバルなスポーツとして着実な歩みを示すハンドボール界がいっそうその声価を高める史上最高の大会となることは間違いない。

（S）

◎第5回世界女子選手権リポート

日本はまたしてもトライアルゲーム（前哨戦、9、10頁）の好調を本舞台へ持ちこめなかった。

連続出場者7名に進境著しい新鋭5名を加えた日本代表は、技心体ともに、かつてない強力な布陣で、厚く高く立ちふさがっていた〃ヨーロッパの壁〃を突破するものと期待されたが、肝心の大会序盤に、持ち前の鋭さを欠き、9位決定リーグに入り、ようやくリラックスした動きをみせる不運から10位に留った。しかし、今回低調とはいえ前チャンピオンの東ドイツと互角に戦った試合をはじめ、日本のフェアでスピーディな動きは、IHF（国際ハンドボール連盟）筋や各国関係者、ファンの賞讃を一身にうけた。

日本の試合ぶりを、井薫全日本女子監督と、チームに同行、大会を見学した藤原侑氏（日体大女子監督）に伝えてもらった。

体格差、パワー不足解決せず

予選リーグB組

第1戦・ルーマニア（前回4位）との試合は、ザビドビッチスポーツホールで12月8日午後6時から行われた。審判＝ヤフス、ヴィトルス（ソビエト）　観衆＝千五百

ルーマニア 24（14－8、10－4）12 日本

得	【日本】		【ルーマニア】	得
0	小原	GK	イオネスク	0
0	和田	GK	モーゼ	0
2	垂水	FP	ズース	10
0	米	FP	アルギィール	4
1	牧野	FP	フルコオイ	1
2	蔵田	FP	コヨカル	4
6	古佐原	FP	オアンシア	1
1	島田	FP	ポパ	0
0	三毛	FP	ポトロビッチ	2
0	山下	FP	フリプナック	1
0	鳥居	FP	フイリイ	0
0	高野	FP	ミクロス	1
12	(7)	7MT	(6)	24

○……いかにも材木の国らしく、天井一面に張られた板は、そのままフロア材に用うこともできそうだ。

今シーズン、トライアルゲームでは低調と伝えられたルーマニアだが、さすがに本大会へ臨んで強力なプレーを見せた。

日本は、相手の強引なポストプレーと7MTで先制を許し、そのあとも、基本どおりの巧みなフォロープレー、ロングシュートなどを使い分けられ傷口を大きくした。

○……日本は速攻、クイックプレーが思うように出ず、蔵田、古佐原島田らがフェイントプレーから得点、特に古佐原は7MTを含めて6点をとり、館内の大声援をうけたのだが、体格差はいかんともしがたく、ダブルスコアの完敗を喫した。

ルーマニアの強引なカットインとポストからプロンジョンに入られる前のプレーを早い詰めで防ぎ止めることが、この日にかけた策戦だったが、いずれも後手にまわってしまい、しかも、相手シュート阻止から一気の速攻を仕掛けるもくろみもはずれ、一方的な経過で押しまくられた。

○……結果的には、やはり守備力の差が勝負につながった。前回以来、これは日本の大課題としてチームも、選手も充分な対策をつんでの出場であったのだが……。

（藤原）

後半、同点も束の間

第2戦・ノルウェー（ヨーロッパ地域）との試合は、ザビドビッチスポーツホールで12月9日午後6時から行われた。審判＝クリスティッチ、ドビューザ（ユーゴ）、観衆＝千五百

ノルウェー 16（10－4、6－5）9 日本

○……オランダ国際トーナメント（別掲）での勝利もあって、日本は自信にあふれての対戦だったがノルウェーは、1m81のフラセットを加えて登場。

前回に、この長身のエースに日本は押しまくられているだけに、その〃つぶし〃には対策もころじていたし、ポストプレーに対する防禦も、ルーマニア戦後、同国コーチングスタッフの助言を得て、まずまずのデキを示した。

得	【日本】		【ノルウェー】	得
0	小原	GK	ファウスク	0
0	和田	GK	キウル	0
1	垂水	FP	ツペター	1
0	米	FP	ブレーヌ	0
1	牧野	FP	ハルボルセン	1
3	蔵田	FP	B・アンデルセン	2
1	古佐原	FP	ベンズバーグ	4
0	島田	FP	フラセット	5
0	三毛	FP	アニスダール	0
0	鳥居	FP	ヘシエン	0
0	山下	FP	G・アンデルセン	2
0	高野	FP	クヌドセン	1
9	(5)	7MT	(2)	16

日本代表チーム

▽団　長　田村正衛（日本協会会長）
▽監　督　井　薫（大洋デパート監督）
▽コーチ　鈴木義男（田村紡監督）

	氏名	年齢	所属	身長	体重
▽GK	小原　名苗	(25才,	大洋デパート)	163cm	54K
	和田　祥子	(21	大崎電気)	167	64
▽FP	垂水　秀代	(25	大洋デパート)	163	53
	牧野　涼子	(24	東京重機)	162	59
	米　恵美子	(25	大洋デパート)	161	56
	三毛　直子	(24	田村紡)	163	59
	古佐原ひろ子	(23	東京重機)	153	48
	島田　夏枝	(23	大洋デパート)	163	52
	蔵田　照美	(22	大洋デパート)	163	53
	鳥居　君子	(21	プラザー工業)	162	58
	山下恵美子	(20	大洋デパート)	160	56
	高野　晴子	(20	日本ビクター)	152	52

○……前半を終って1点差は、後半一気の勝算を抱くに充分。開始直後、古佐原のゲットで6－6としたことでその公算をより強いものにしたハズだった。

しかし、そのあとノルウェーの中央攻撃をまともにうけて、連続4失点したのが痛く、さらに退場をつづけさまに課せられたためノルウェー攻撃陣をいっそう楽に動かせてしまった。

○……ルーマニア戦同よう、相手シュートの確率が高かったため、得意の速攻にもちこむことが難しかったのも日本にとっては誤算である。

また、日本の得点は小廻りの利くプレイヤーのあげたもので、速攻とロングシュートはほとんどといってよいくらい不発だった。

これは、ディフェンス時に於いて体力の消もう度がはげしく、そのため、オフェンスに廻った時、力を存分に発揮できないからだった。予選リーグ突破はまたしても成らず、今回もパワーという点で欧州勢とまだまだへだたりのあることを痛感させられた。（井）

フラセット選手にわかの登場

○……前回の大会で苦しめられたノルウェーのエース、カレン・フラセットに対して日本は警戒の色を濃くして旅立ったが、オランダ国際の時には姿を見せず、関係者は「彼女はもう国際試合に出ない」と語っていた。

しかし、日本のコーチ陣は、これを真にうけず〝エース温存〟とみていたが、フランス、ユーゴを転戦する間に集めた情報も、すべてフラセットは第一線を退いた、というものだった。

○……世界選手権の第1次エントリー名簿(プログラム)にも同選手の名はみえず、ここでようやく日本選手団も〝引退〟を信じたわけだが、いざ開幕してみると彼女は「13」の背番号をつけて現れた。

名儀変更の認められる大会前々夜の24時直前に届出たもので、12ケ国188選手のうち変更があったのは彼女一人だけ。徹底した〝隠密策戦〟だったのか、それとも急きょ呼び寄せたものなのか真相は判らぬが、世界選手権ともなれば、その舞台裏は奇々怪々である。

ルーマニア 10（6－2、4－3）5 ノルウェー

9～12位決定リーグ

第1戦・オランダ（ヨーロッパ地域）との試合は12月12日午後5時からノビサド・スポーツパレスで行われた。観衆＝千五百

日本 15（9－3、6－8）11 オランダ

得	【日本】		【オランダ】	得
0	小原	GK	レインデルス	0
0	和田	GK	カンプ	0
2	垂水	FP	ストリットメイヤー	1
2	牧野	FP	プット	2
0	米	FP	T・ヘンドリックス	4
0	山下	FP	パールストラ	1
0	三毛	FP	Tr・ヘンドリックス	1
5	蔵田	FP	マルテン	0
4	古佐原	FP	ルテン	2
1	島田	FP	ジョン	0
0	鳥居	FP	クック	0
1	高野	FP	ギールディング	0
15	(5)	7MT	(1)	11

○……日本は前哨戦で快勝した相手だけにゆとりがあり、攻守ともにのびのびとプレー、それがスコアにもあらわれた。

「世界選手権」に同行して

団長　田村正衛

一ケ月の旅、私としては全員が無事帰国できたことが先ず何よりです。

が、十一月三十日パリで大洋デパートの火災を知らされたときのあの大きなショックは全く言葉では云い現わせません。そして其間を井監督と大洋の選手たちが黙って耐えてくれた心境には只だ有難うと合掌するだけです。戦績はご承知の通りで皆さんのご期待には添えませんでしたが私としては本当に良くやってくれたと思います。あの時あのショックさえ無ければノルウェーには勝って決勝リーグ進出も出来たろうにと残念でたまりませんがこれも天命、不幸とあきらめるより致し方ありません。

でも、順位決定で戦前優勝候補と評されていた東独に善戦し、オランダ、西独を抜いて十位になり得たことがせめてもの土産とお許しを頂きたい。事実現地での評判もあの大きな体格の欧州勢に対し小兵の日本がスピードでカバー、コートいっぱいに走りまくったプレーはこれこそ本当のハンドボールだ、これに今一瞬の速いテンポのゆさぶりが加わったら日本は将来恐るべき強敵だろうとさえ云われたほど見事なものでした。この評は今後の課題として討議してほしいような気がします。

最後に遠征中は全員が仲良く一丸となってやってくれたことと訪問先のオランダ、フランスユーゴの各国共皆んな心温まる歓迎で私たちを歓待してくれたことを厚く感謝し私の報告とします。

（日本協会々長）

こうした緊迫した大会では、いかに精神的な優位が影響するかを示した一戦とも云えた。

オランダは大会直前、ギニア（アフリカ代表）が棄権したことから、繰りあげ出場の幸運をつかんだが、ポスト以外に得点源がなく単調なプレーだった。

しかし、後半、日本のディフェンスが少し当りが弱まると、すかさずポイントをあげる。

ヨーロッパ女子の定型ともいえるポストからの突破口をいかに防ぎ止めるかが、日本の今後の躍進の一つのカギだろう。

（井監督談話）

前回の勝者に健闘

第2戦・東ドイツ（前回優勝）との試合は12月13日午後5時からソンボル市民体育館で行われた。審判＝L・ケステリ、L・マルキ（ハンガリー）観衆＝千六百。

東ドイツ 17（7－8、10－4）12 日本

【東ドイツ】		得
GK	バルデベルグ	0
	プロス	0
FP	ゲールホフ	4
	ミハエリス	2
	ヤンカー	1
	ユングハンス	0
	ヘルビー	1
	テイッツク	4
	ライター	2
	クレスマー	3
	ハインリッヒ	0
	ボムス	0
		17

得	【日本】	
0	小原	GK
0	和田	
2	垂水	FP
0	米	
0	牧野	
3	古佐原	
3	蔵田	
3	島田	
0	鳥居	
0	三毛	
1	高野	
0	山下	
12（2）7MT		

○……「まさか」と思う東ドイツの転落だった。

選手たちも何か気落ちしていたようで、我々はチャンスとみたのだが、始ってみると、やはり迫力に満ちた攻守で、じわじわと点差を開かれた。

しかし、日本もムードがあがり特に後半はすばらしいスピードで東ドイツのディフェンスを切り崩せた。

前半、波にのり切れず、そこをつかれて点差を開かれたのが悔やまれる。

観衆も、日本に一方的な声援を送り、選手たちも熱っぽいプレーを展開、敗れたとは云え満足のいく内容であった。（井監督談話）

序盤に勝負決める速攻

第3戦・西ドイツ（前回5位）との試合は12月14日ノビサド・スポーツパレスで行われた。

日本 13（8－7、5－3）10 西ドイツ

【西ドイツ】		得
GK	メンツェル	0
	ランジェル	0
FP	ワグネル	2
	ケスラー	0
	V・キント	2
	クレブス	0
	I・キント	1
	クルース	1
	ネウツェ	0
	プラクト	2
	ヤコブ	2
	クスター	0
	（2）	10

得	【日本】	
0	小原	GK
0	和田	
2	牧野	FP
2	古佐原	
3	垂水	
0	島田	
3	米	
1	高野	
0	三毛	
0	山下	
0	鳥居	
2	蔵田	
13（2）7MT		

○……日本は速いペースと秀れたジャンプ力で西ドイツを圧倒した。

特に開始1分牧野に始まり2分4分の米の連続ゲットであげた3点のゴールは〝日本のスピード〟を観衆に強く焼きつけた。

西ドイツはクスターのシュート力を活かすフォーメーションで攻めこんだが、日本のディフェンスの手固い動きに19分間ノーゴール20分ようやく7MTで1点をあげた。

後半、西ドイツは5分5－5のタイに迫いついたが、日本も垂水の速取と古佐原で、すぐにリードを奪いなおした。

終盤は、たがいに守りの動きが鈍り、得点しあったが、日本は序盤のリードを活かして逃げ切った（この項、ユーゴ紙〝スポルティク・ノーボスティ〟より）

▽9－12位決定リーグ

東ドイツ 14（6－3、8－2）5 西ドイツ

西ドイツ 18（6－2、12－3）5 オランダ

東ドイツ 15（8－6、7－8）9 オランダ

【順位】⑨東ドイツ3戦全勝（得46失26）⑩日本2勝1敗（40、38）⑪西ドイツ1勝2敗（33、32）⑫オランダ3敗（25、48）

次回はモスクワか　モントリオール・オリンピックへの出場権（上位5ケ国）をかける第6回世界女子選手権は、一九七五年（昭50）下半期、モスクワを中心に開かれる公算が強い。

井薫全日本女子監督の話

前回の経験を活かし、トライアルゲームでは、七分程度の力で試合を進める計画も巧く運び、鳥居和田、高野、山下、蔵田らの初出場組も、ヨーロッパチームの試合運びを覚え、自信をつけての乗りこみだっただけに残念です。

やはり、世界選手権独特のムードに、予選2試合はのまれ、リラックスした気分になったのは9位決定リーグに入ってからでした。

特に、東ドイツ戦は、敗れたとは云え存分に力を発揮、この一戦で選手たちも気が晴れた感じです。日本の今後の課題はやはり、相手の体格を利した押しこみをどう防ぐかで、攻撃面ではまずまずのレベルに到達したと思います。

女子選手の公式試合数　日本協会は、世界女子選手権終了時点で、女子選手（現役のみ）の公式国際試合出場数などを次のようにまとめた。

垂水、牧野、三毛ら7人の試合数18は、これまでの最多、黒川泰恵、宇井敬子（ともに元大崎電気）の15を上まった。

垂水18試合（通算48得点）、古佐原18（35）、島田18（27）、牧野18（23）、米18（9）、三毛18（5）、小原18（0＝GK）、蔵田10（26）、鳥居10（14）、高野10（6）、山下10（3）、和田10（0＝GK）

◎オランダ国際トーナメント

国際舞台で初の優勝

オランダ女子国際トーナメント（3国対抗）は、11月23日から3日間、アーンハイムを主会場に日本、オランダ、ノルウェーの総当り戦で行われ日本が好調な攻守で2勝、優勝を飾った。

日本が、国際大会で優勝したのは、男子のミュンヘンオリンピックアジア予選（46年11月、東京）、ボインツアカップ（44年6月、ルーマニア）に次いで3度目、女子では初めてのこと。ヨーロッパのナショナルチームを相手にした大会では男女を通じて初めてという〝快挙〟である。

幸先よし、第1戦飾る

第1戦・オランダとの試合は11月23日午後9時からホーグベン・スポーツホールで行われた。（観衆五百五十）

日　本 16（7—5、9—5）10 オランダ

○……日本は前、後半を通してミドル、サイドシュートがよく決まりポストプレー、速攻のコンビネーションも順調だった。

得	【日本】		【オランダ】	得
0	和田	GK	レインデルス	0
0	小原	GK	カンプ	0
4	鳥居	FP	ハーストレクト	0
3	島田	FP	ヘンドリックス	4
1	蔵田	FP	プット	0
4	古佐原	FP	バールストラ	1
1	山下	FP	ストリットメイヤー	0
0	高野	FP	ギールディンク	1
1	垂水	FP	マルテン	3
1	牧野	FP	スランゲン	1
1	米	FP	ルテン	0
0	三毛	FP	クック	0
16		7MT		10

前、後半で各2回得た7MTも確実に決め、スキのない日本の攻守に観衆は拍手を送り、目を見はっていた。

これに対しオランダは、前半はポストプレーからチャンスをつかんでいたものの、後半、日本のディフェンスに巧みにポストをつぶされると、動きが鈍くなり、個人技にたよった単調な攻めに終った。

日本では古佐原、島田、鳥居、オランダではヘンドリックス、マルテンのシャープなプレーが目についた。（藤原）

ノルウェーにも勝つ

第2戦・ノルウェーとの試合は11月24日午後9時30分からアーンヘムのエスカ体育館で行われた。（観衆三百）

日　本 14（8—7、6—5）12 ノルウェー

得	【日本】		【ノルウェー】	得
0	和田	GK	キウル	0
0	小原	GK	ファウスク	0
0	三毛	FP	ツベター	0
2	島田	FP	クヌドセン	0
1	蔵田	FP	ブレーヌ	1
2	古佐原	FP	ハルボルセン	5
6	鳥居	FP	アニスダール	3
3	高野	FP	ベンズバーク	3
0	山下	FP	アールギャルト	0
0	米	FP	アンデルセン	0
0	牧野	FP	モエン	0
0	垂水	FP	ホゾイエン	0
14（2）		7MT	（3）	12

○……ノルウェーはベストメンバーで臨み、日本は垂水、牧野、米、小原らを温存しての対戦。

ノルウェーの攻撃は、常にポストの速い動きによる守備陣のかくらんからチャンスをつかむというパターンであったが、日本はそれにふりまわされず、ロングからのシュートを誘いこむ策戦をみせ、みごとにそれが成功した。

日本は攻撃面でも高野、古佐原の速攻、セットからは鳥居のミドルがよく決まり、無駄のない試合運びだった。この結果、日本は最終日のオランダ×ノルウェー戦を待たず優勝を決めた。（鈴木義男＝全日本コーチ）

▽第3戦（11月25日、ツベロスポーツホール

オランダ 9（4—3、5—5）8 ノルウェー

【順位】①日本②オランダ③ノルウェー

国際親善試合

▼オランダ・遠征第3戦として11月25日午後1時30分からツベロスポーツホールでニロッククラブと対戦。（観衆五百）

日　本 9（5—5、4—4）9 ニロックHC
引き分け

得	【日本】		【ニロック】	得
0	和田	GK	ベルツァー	0
0	小原	GK	ブウレン	0
2	古佐原	TP	メイヤー	2
3	高野	TP	ランザト	2
1	鳥居	TP	ピラー	0
1	三毛	TP	ドールゲスト	0
1	島田	TP	ビーク	0
1	蔵田	TP	ルース	1
0	米	TP	ベルデンバーグ	0
0	垂水	TP	エールハート	0
0	牧野	TP	ワート	2
0	山下	TP	スミット	2
9		7MT		9

○……前夜（ノルウェー戦）の疲れが充分にとれず、日本の動きは鈍かった。

一方のニロックは、オランダナショナルよりも、そのまとまりにおいて強いと云われるほどのクラブで、しかも日本に一あわふかそうとする気力も強く、歯ごたえのある相手だった。

特に、かつてのナショナルプレイヤー・メイヤーの左腕からのロ

ングシュートとカットインプレーはみごとなものであった。
日本は、好機をパスミスでつぶし、ニロックはダイナミックなローリングプレーなどを見せ好対照だったが、日本は古佐原の2本の7MTを活かして辛くも引き分けた。（藤原）

地域選抜に圧倒勝ち

▼フランス・遠征第4戦として11月27日、ドルー市体育館でパリ地域中西部選抜と対戦。

日本 28（12－3、16－2）5 パリ地域中西部選抜

得	【日本】		【中西部選抜】	得
0	和田	GK	マドレーヌ	0
0	小原	GK	B・アンニック	0
2	垂水	FP	マリオンヌ	0
4	牧野	FP	G・ゴシアーヌ	0
4	米	FP	シリバーヌ	0
1	三毛	FP	P・ゴシアーヌ	0
2	島田	FP	キャロリーヌ	0
4	蔵田	FP	ジャクリーヌ	1
7	古佐原	FP	H・アンニック	0
0	山下	FP	クリスチーヌ	3
1	鳥居	FP	ミレー	0
2	高野	FP	ブリジット	1
28（3）		7MT	（3）	5

○……パリからバスでおよそ90分、全国リーグ2部で活躍するAC・ドルーを中心とした中西部選抜が相手だったが、若い選手が多く、動きの固さから凡失を続出させ、スタートからレギュラーで臨んだ日本の一方的な選手運びとなった。
日本は、速攻、セットともよくまとまり、ディフェンス、GKも順調の仕上りといえた。

中西部選抜は、強引に射っては日本の速攻を受けた。観衆は日本の直線的ななだれこみと、ゴール前でのクロスプレーに惜しみない拍手を送り、点差の割に館内は盛りあがった雰囲気に終始した。
なお、シュート数は日本40、中西部選抜36。（藤原）

フランスナショナルに4連勝

遠征第5戦は11月30日午後9時からパリのクーベルタン体育館小球技場（38m×20m）で、フランスナショナルとの公式国際試合として行われた。審判＝グルトリング、ブラウン（西ドイツ）。（観衆一千八百）

日本 18（9－6、9－8）14 フランス

得	【日本】		【フランス】	得
0	和田	GK	スクレプル	0
0	小原	GK	ガイラルド	0
5	垂水	FP	コーニック	0
5	牧野	FP	アスパス	3
0	米	FP	ビブー	1
0	三毛	FP	ジシア	0
5	古佐原	FP	クェベレウス	1
1	鳥居	FP	カルレ	2
0	島田	FP	ツリジュレット	4
2	蔵田	FP	ノエル	3
0	山下	FP	ギャラント	0
0	高野	FP	マリン	0
18（1）		7MT	（1）	14

○……フランスはノエルを軸に積極的な攻撃で先制、日本はコートの狭さから得意の速攻があまり利かず苦しい試合ぶりだった。
しかし、セットから俊敏な動きで、フランスのディフェンスを崩し、巧妙に得点、後半に入ってもスピードは劣えず、疲れのみえた相手を押しこみ、18分には17－11と大勢を決した。
フランスでは、一週間前の西ドイツB戦でも活躍した左腕・ツリジュレットの活躍が目立った。日本×フランスの女子公式戦の通算成績は日本の4戦4勝。（この項フランスのスポーツ紙〝レキップ〟より）

日本の先制実らず

▼ユーゴ・遠征第6戦は12月3日ザグレブ体育館でユーゴナショナルとの公式国際試合として行われた。審判＝ユリック、モズニッキー（ユーゴ）。（観衆一千）

ユーゴ 21（9－4、12－7）11 日本

得	【日本】		【ユーゴ】	得
0	和田	KG	イストバノビッチ	0
0	小原	KG	ティトリッチ	0
2	三毛	FP	ロジック	0
0	古佐原	FP	パレザノビッチ	2
1	山下	FP	イレース	5
0	高野	FP	トルティ	3
1	島田	FP	スプリノビッチ	3
5	蔵田	FP	アンティック	5
0	垂水	FP	ベイノビッチ	0
0	牧野	FP	チコース	2
0	米	FP	パラベルサ	0
2	鳥居	FP	ブルバネッチ	1
11（1）		7MT	（4）	21

○……日本の出足は好調、若手のハッスルと相手のミスが重って3－0、しかし、本番を前に自信にあふれたユーゴは次第に地力を発揮して日本は主導権を奪い返された。
後半になると、完全にユーゴのペース、日本は相手の一線防禦にポストプレーを封じられ、外からのシュートはほとんどディフェンスにはじき返された。クイッククロスからのシュートが数本決まったのは、対東欧策戦として有効とみてよい。ルーマニアコーチ陣がスカウトしていると聞き、若手中心で試合を進めたが、動きもよく善戦といってよいと思う。（井）

ディフェンスに課題残す

遠征第7戦は12月5日バラディン体育館でユーゴナショナルとの公式国際試合として行われた。審判＝ドマエ、クリスティック（ユーゴ）（観衆五百）

ユーゴ 22（12－5、10－8）13 日本

得	【日本】		【ユーゴ】	得
0	和田	GK	イストバノビッチ	0
0	小原	GK	ティトリッチ	0
3	古佐原	FP	ロジック	0
0	三毛	FP	ブルバネッチ	3
1	山下	FP	スプリノビッチ	1
0	高野	FP	パラベルサ	3
1	島田	FP	ルーター	3
2	蔵田	FP	パレザノビッチ	2
2	鳥居	FP	イレース	5
1	米	FP	トルティ	2
2	牧野	FP	アンティック	2
1	垂水	FP	アブラモビッチ	1
13（2）		7MT	（1）	22

○……両チームとも動きの早い攻防を見せ、女子の試合としては〝最高水準〟といえる内容だった。
日本は7MTで先制しさらに速攻とロングでリードを奪ったのは第1戦と同じだったが、ユーゴも日本と劣らぬクイックプレーを見せて、前半なかばから優位に立った。
後半になると、ユーゴは、日本の弱味である長身者のポストプレーを多用して得点を重ね差を拡げた。
日本の課題はやはりディフェンスにあるようで、判っていながらも大柄な相手にじりじりと押しこまれてしまう。
■後半のユーゴは、本大会の優勝最有力と云われるにふさわしいスピードと力感にあふれ、つねに緊迫したプレーを見せていたのは、9月に来日した男子の金メダリストたちとまったく同じ〝姿勢〟であった。
日本は、ルーマニアなどの目を意識してレギュラーで応戦したのは5分間程度だったが、外国相手に自分の力を発揮できるようになったのは大きな収穫だ。これで本番を控えてのトライアルゲームの成績は7戦4勝1分2敗。（藤原）

東京で解団　世界女子選手権で健闘した全日本女子は12月18日午後5時44分羽田着の日本航空機で帰国、翌19日朝、東京の宿舎で解団した。

第5回 世界女子選手権 記録

（日本関係分を除く）

【カット写真はユーゴ対ルーマニアの決勝戦】

東ドイツ（前回優勝）予選で敗退

予選リーグ

◇A組

ハンガリー 12（8－1 4－6）7 チェコ

チェコ 16（8－3 8－6）9 西ドイツ

ハンガリー 18（7－3 11－4）7 西ドイツ

【順位】①ハンガリー②チェコ③西ドイツ

◇C組

ソビエト 8（5－4 3－2）6 ポーランド

ソビエト 7（4－1 3－3）4 東ドイツ

ポーランド 11（5－4 6－7）11 東ドイツ

【順位】①ソビエト②ポーランド（得失点差マイナス2）③東ドイツ（マイナス3）

◇D組

ユーゴ 20（9－2 11－2）4 オランダ

デンマーク 13（6－3 7－1）4 オランダ

得	【ソビエト】		【東ドイツ】	得
0	セルスティユク	GK	ゾベル	0
		GK	パルデベルグ	0
5	ツルシーナ	FP	ゲールホフ	1
0	マカベック	FP	ボンシェ	0
1	リトセンコ	FP	ヤンカー	0
0	ボブルース	FP	ユングハンス	0
1	スピーナ	FP	カーント	1
0	ロスピーナ	FP	ハインツリッヒ	0
0	ザハローワ	FP	ブラウン	0
0	ピノスク	FP	ヒリター	1
		FP	クレスマー	1
		FP	テイッツ	0
7		7MT		4

ユーゴ 11（4－7 7－3）10 デンマーク

【順位】①ユーゴ②デンマーク③オランダ

○……最大の波乱は2連勝を狙っていた東ドイツの敗退である。前哨戦の成績もよく、今大会の最有力優勝候補として誰もが疑わなかったのだが、ソビエトのすばらしい気力が前半の先制に実り、特にツルシーナのスピードにあふれた攻撃は圧巻だった。

しかし、この段階でもまだ栄冠の望みは残っていたのだが、最終戦ポーランドの健闘にあい、終盤追いこんだもののついに追い抜けず大番狂わせとなった。ソビエト戦の激闘で主力を負傷させた不運もあったが、ここはポーランドの善戦を賞したい。

○……A、D組は順当。女子ハンドボールの祖国・西ドイツは若手を揃えて臨んだが、立ちなおりにはほど遠い試合ぶり。劣勢とみられていたデンマークがユーゴに冷や汗をかかせた。前半のリードを守ろうと消極的になったところを、必死の反撃に転じたユーゴにつかれて惜敗、後半はじめスパートすれば大波乱がおきたろう。

準決勝リーグ

◇1組

ハンガリー 14（7－1 7－2）3 ノルウェー

ルーマニア 10（5－4 5－4）8 チェコ

チェコ 12（5－5 7－3）8 ノルウェー

ルーマニア 12（5－7 7－4）11 ハンガリー

ハンガリー×チェコ、ルーマニア×ノルウェーの2試合は予選リーグの記録を適用。

【順位】①ルーマニア3戦全勝②ハンガリー2勝1敗③チェコ1勝2敗③ノルウェー3敗

◇2組

ソビエト 10（5－3 5－7）10 デンマーク 引き分け

ポーランド 9（5－4 4－4）8 ユーゴ

デンマーク 12（7－7 5－5）12 ポーランド 引き分け

ユーゴ 7（4－3 3－2）5 ソビエト

ソビエト×ポーランド、ユーゴ×デンマークの2試合は予選リーグの記録を適用。

【順位】①ユーゴ2勝1敗②ソビエト1勝1分1敗（得失点差0）③ポーランド1勝1分1敗（マイナス1）④デンマーク2分1敗

○……1組ではかつての優勝国同士ルーマニア×ハンガリーがハイライト。ハンガリーはバーバラ・トースがいぜん元気なうえステルピンスキーも好調で、チャンスを確実にモノにした。ハンガリーの迫力に比べルーマニアはやや線が細い印象をうけたが、後半になるとディフェンスの立ちなおりと、ゾスの好技で点差をつめ10分すぎついに逆転、いかにも〝ここ一番〟に強いところを見せた。

○……2組はデンマークががぜん波乱の目となった。東ドイツを破って意気あがるソビエトを激しく追いこみ引き分け。ユーゴを降してがぜん優位に立ったポーランドとも星を分けた。ソビエト、ポーランドにとってデンマークに食い下がられたのは正に誤算で、逆にユーゴが息を吹き返すことになった。

○……ユーゴ×ソビエト戦は微妙な星勘定がからんだ。ソビエトは引き分けでも1位、ユーゴは勝たないかぎり優勝戦へ進出できない。〝事実上の決勝〟といわれるにふさわしい死闘の末、地元の大声援をうけたユーゴがソビエトを振り切った。

ユーゴ、後半「優勝」へ一気

優勝戦

ユーゴ全土が興奮のるつぼと化した決勝・ユーゴ×ルーマニアの試合は、八千近い大観衆を集めたベオグラードスポーツホールで12月15日午後6時45分から行われた

ユーゴ 16（9－4、7－7）11 ルーマニア

得	【ユーゴ】		【ルーマニア】	得
0	イストバノビッチ	GK	イオネスク	0
1	ルキック	FP	モーゼ	0
0	アブラモビッチ	FP	アルギール	0
3	イレース	FP	ゾス	2
4	トルテイ	FP	ポパ	0
2	スプリノビッチ	FP	ペトロビシイ	4
4	アッティエ	FP	フリンク	0
0	ベイノビッチ	FP	フルコイ	0
0	チコース	FP	イリイ	3
2	パラベルサ	FP	コヨカル	1
0	ティトリック	FP	オアナシア	1
16		7MT		11

○……スピーディなゲームで、大観衆は興奮によいしれた。

ユーゴは主力のパレザノビッチがソビエト戦で負傷、この大事な試合に出られず苦戦を強いられた

ユーゴは巧く先制点をあげたが、ルーマニアも粘り、特に3－5から4－5、5－5としたあとはまったくの互角、場内は沸きっぱなしだった。

後半になると、ユーゴは、一気にスパートし、たてつづけに4ゴール、11－7としたのが大きかった。さしものルーマニアも、このダメージは大きく、それでも必死の反撃を試みたが、ユーゴのベテランGKイストバノビッチと出足のよいディフェンスに要所をおさえられて、涙をのんだ。

○……ユーゴはこの大会悪戦苦闘で、しかも決勝は大駒一枚を欠いていただけに「よく勝った」という印象が濃い。連日詰めかけた地元ファンの大声援が大きな力になった、といえる。

男子の金メダル（ミュンヘンオリンピック）と並ぶ優勝、一九六〇年代に入ってすぐルーマニアが世界選手権で男女制覇して以来の快挙で、文字どおり「ハンドボール王国」となった。

ルーマニアも健闘したが、つねにユーゴに先手を許したのが、敗因。

順位(3～8位)決定戦

3・4位決定戦は12月15日午前11時15分からベオグラード・スポーツホールで行われた。（観衆二千五百）

ソビエト 20（9－7、11－5）12 ハンガリー

得	【ソビエト】		【ハンガリー】	得
0	セルスティユク	GK	ブジョーソ	0
		GK	スティーラ	0
2	ツルシーナ	FP	B・トース	7
7	マカベック	FP	パクシ	0
7	リトセンコ	FP	ラキ	0
0	ピノスク	FP	ステルピンスキー	2
0	ザハローワ	FP	クシク	2
0	ミロスニク	FP	タカクス	0
1	ゴンチャローワ	FP	パダス	0
1	ボブローワ	FP	ニヤリイ	1
1	ロスピーナ	FP	レクス	0
1	ボブルース	FP	タバシ	0
20		7MT		12

健闘のポーランド5位に

5・6位決定戦は12月15日午前10時からベオグラード・スポーツホールで行われた。（観衆千五百）

ポーランド 15（9－7、6－6）13 チェコ

得	【ポーランド】		【チェコ】	得
0	ピエロット	GK	バルタコーワ	0
		GK	ムールコーワ	0
0	ポテイカル	FP	マチソーバ	4
3	ドレッセル	FP	ホルチノーワ	0
2	クス	FP	ブクサローワ	1
0	ピオトロスカ	FP	ブルノーワ	1
1	コストルツ	FP	ゼマノーワ	4
1	ロスピーナ	FP	ウクルプコーワ	1
1	ボネンベルグ	FP	スイスケローワ	2
1	ゴトウコウ	FP	バソーワ	0
1	クザルナシアク	FP		
5	リツヴィン	FP		
15		7TM		13

北欧勢が7、8位

7・8位決定戦は12月15日午後5時30分からベオグラード・スポーツホールで行われた。（観衆五千）

デンマーク 12（4－5、8－5）10 ノルウェー

得	【デンマーク】		【ノルウェー】	得
0	ヴィルヘルゼン	GK	ファウスク	0
2	スゲセン	FP	ツベテール	0
0	A・ニールセン	FP	クヌードセン	0
1	L・ニールセン	FP	ブレーヌ	4
2	ハンセン	FP	フラセット	3
3	クリステンテン	FP	クール	0
0	マドセン	FP	アンデルセン	1
0	リース	FP	アニスダール	1
3	ラゲルボン	FP	クログスルット	1
0	ヨルゲンセン	FP	ハルボルセン	0
1	ジェンセン	FP	ベンスベルグ	0
12		7MT		10

インド、積極的な意気ごみ

日本協会が非公式に得た情報によると、今回の世界女子選手権を前に、インドが出場意思を示し、IHF（国際ハンドボール連盟）へ打診したことが判った。

もちろん、インドはIHFにまだ加盟を認められていず、問題とならなかったが、渡辺和美IHF理事（日本協会副会長）の話によれば、すでに加盟申請も出されており、その意気ごみは今後のアジアハンドボール界のなかで見逃せぬものとなりそうである。

第14回 ＩＨＦ審判研修会 報告

安藤純光
（日本協会審判部長）

ＩＨＦ主催第一四回国際審判員研修会は、昨一九七三年十月八日から一二日まで五日間にわたってブルガリアのブルガスにおいて開催された。

今回の研修会には日本から佐野和夫、安藤の二名が参加した。両名の参加に際して、全国の関係諸氏から物心両面にわたって多大のご支援をいただいたことについて、本誌上をかりて厚くお礼を申しあげる。

以下今回の研修会について、日程にしたがって報告する。

◇会場の環境

ブルガリアの首都ソフィアからさらに一時間ほど飛んだところにブルガス空港がある。会場は空港から三五ｋｍ、静かな田園地帯を走った黒海沿岸の海水浴場の砂浜に接した一九階建てのホテル「ブルガス」であった。このホテルが宿舎であり、会議場であった。海水浴場とは云っても、日本とほとんど変らない気候のブルガスでは、すでにシーズンオフであり、わずかな海水浴客がいるだけで、全く静かなオフシーズンの海水浴場であった。

審判技術の実技研修は、このホテルからバスで五分ほどのところにある戸外のハンドボール競技場三面（スタンド付き）のうち二面を使用して行なわれた。

◇研修会参加者

ＩＨＦ加盟国のうち二二ケ国から、審判部長と二人の審判員というフォーマルな形での参加、日本のように二名での参加、そしてわずかではあったが一名での参加国もあった。出席者は総数約百名であった。この研修会を開催するＩＨＦからは、Ｒ・Ｓ・Ｋ(Regel und Schiedsrichter Kommission）から委員長である Emil Horle ほか Axel Ahm, Marijan Flander, Janis Grinbergas, Vilnius, Jean-Pierre Lacoux そして技術委員会からルーマニアの Kunst, ドイツの Vick が出席した。

◇研修会の日程

▽第一日

九時……組織委員長 ブルガリアハンドボール協会会長 Penko Apostolow および Petko Sterew 両氏の歓迎のあいさつがあった。つづいて Emil Horle 氏の開会のあいさつと参加国および参加者全員の紹介があった。

一〇時……Emil Horle 氏により「ハンドボール競技における退廃的な不安の兆候」と題する講演があった（要旨後述）

一四時……実技研修。Ａ・Ｂの二面の競技場を使用して、割当てられた審判員がハーフ（三十分）ずつを担当し、これを二人の観察員（各国審判部長クラス）がメモを手に観察している。さらにＡコートには Emil Horle, Jean-Pierre Lacoux, Ｂコートには Marijan Flander, Axel Ahm が各審判員の判定や態度について観察し、メモをとっていた。競技はブルガリアの一線級の男子一二チームによって行なわれた。

一八時三〇分……ＩＨＦのルールに関する16㎜フィルム（日本にもある）を見る。

▽第二日

九時……前日行なわれた実技研修における各審判員に対する分析と批評が各観察員から詳細に行なわれた。

一〇時三〇分……一九七三年ＩＨＦハンドブックにおける改正点について説明が行なわれた。

一四時……実技研修。前日同様に実施された。

一八時三〇分……実技研修を含めて審判上の問題点について Emil Horle 氏ほかによって講演が行なわれた。

▽第三日

九時……前日行なわれた実技研修における客審判員の分析と批評

一〇時三〇分……国際審判員の資格について Marijan Flander 氏の講演が行なわれた。

一四時……実技研修。われわれはＢコートの第一試合の前半を割当てられ、「参加して笛を吹く」という今回の目的の一つを果すことができた。終って観察員諸氏から Sekr gut の声ありほっとする。

一八時三〇分……ルールの改正点について説明が行なわれた。

▽第四日

九時……実技研修。

一四時……「四五秒ルール」のデモンストレイション（後述）

▽第五日

九時三〇分……バスに乗って黒海沿岸を観光

二〇時……研修会閉会のパーティが行なわれ二三時散会、すべての行事を終了した。

◇

Ｒ・Ｓ・Ｋ委員長 Emil Horle 氏による「ハンドボール競技における退廃的な不安の兆候」と題する講演の要旨。

――今日のハンドボール競技には是非とも取り除かなければならないような性格がある。その一つは「消極的なプレイ」であり、そしてその双児の兄弟とも云うべき「時間かせぎのプレイ」である。

この「消極的なプレイ」や「時間かせぎのプレイ」が、いつハンドボール界に入って来たかは問題ではないが、これらはハンドボールがつづく限り存在しつづけるであろう。そして残念ながら年とともにずるがしこくなったし、さらに巧妙さを加えていくであろう。とともに、それらを認識し判定することがむずかしくなり、ハンドボールの発展のためには、ますます危険なものになるであろう。

これらはパスの数による結論を出すことはできない。同じ方向へのパスのくりかえしも、攻撃に要する時間も判定の材料にはならない。ただ競技場で展開されているプレイだけを観察することによって判断しなければならない。チームのコーチは、すでに久しい以前から自分たちのチームに「ボールをキープしろ」とか「シュートをするな」とは叫ばなくなっている。ほとんどすべてのチームは、それに対して一つの合い言葉をもっていて、それは当然審判員にはわからないようにされている。

審判員は「消極的なプレイ」や

「時間かせぎのプレイ」を中止させる笛を吹いたあとで、自分は思いちがいをしていなかったと一〇〇%確実に主張することができるのは非常にまれである。そしてこの不確実さが審判員に大きな影響をおよぼすことになる。そのことから消極的なプレイは今まで通用した。

消極的なプレイに対して一回目の反則がとられたあと二回目の判定はなかなかとられないし、さらに三回目の判定がごくまれにしかとられていないことを利用した。審判員が消極的なプレイに対して二分間の退場で罰したり、また五分間の退場で罰したりすることはまれであり、非常にむずかしかった。そこで審判員たちは最初の判定とせいぜい二度目の判定で消極的な競技をほおっておいたのである。

「消極的なプレイ」や「時間かせぎのプレイ」は、多くの悪い面をもっている。そのうちでもスポーツ的敢闘精神に対する裏ぎりであり、専門的な立場ではハンドボール思想への矛盾である。このことは久しい以前から確認されていることであり、是非とも除去しなければならないことである。

「消極的なプレイ」と「時間かせぎのプレイ」は次のようなときに生じる。そしてこれらは単独では起らない。

(A)競技時間が残り少なくなって、チームが一点か二点リードしているとき。

(B)チームが肉体的にスピードを欠いているとき。

(C)チームが大差で敗けたくないとき。

(D)チームが小人数（退場などで）で競技しているとき。

などのときに起る。

このようなことが生じるのは、われわれ審判員、プレイヤー、コーチ、そして専門家たちに責任がないとはいえない。観客は「消極的なプレイ」や「時間かせぎのプレイ」に対して、かならずかん高い口笛を吹いて反応した。このような場合に、これを救済するのはとりわけ審判員の義務である。これらの行為はスポーツマンシップに反する行為として見なさなければならないし、それ故に罰せられなければならない。すべてのケースについて厳格な処方をもうけることは、むずかしいことである。これを正しく読みとり、判定するのはその競技の中立の人、審判員より現場により近くにいる人はいないからである。

一つの試みとしてソビエットに於て四五秒ルールが実施されて一年を経過している――。

◇「四五秒ルール」について

このルールの提案国はソビエットである。研修会の第四日にこのルールの実際が公開された。

概略バスケットボールにおける三〇秒ルールに似たものである。ゴールの後方に黄色と赤色のランプを用意して、攻撃の時間が四五秒になると赤色ランプが点燈し、反対側のチームにボールが移るのである。実際には、この赤ランプによってボールの所属が変ることは一競技中二～三回であった。このルールがハンドボール競技のルールとして登場してくるためには研究、改善が必要であるように思う。最後に今回の研修会に参加して感じた二、三の点を述べて、この報告文を閉じたいと思う。

◇ルールの違いがあったか。

この質問は帰国してから何回となく問いかけられた質問であったが、一口にして云うなら「全く違った点はなかった」と云うことである。この研修会は新らしいルールをつくる会議ではないし、現行のルールによって各審判員が競技を如何に審判するかといういわゆる笛の吹き方の研修をするための集りであった。笛の差を強いて求めれば「チャージング」の判定に若干の差があるように思われた。

◇I・H・F・R・S・K・における審判上の問題点

Emil Horle 氏講演にもあるように、いわゆるストーリングの問題とラフプレイの問題が大きくとりあげられている。これらはハンドボールをハンドボールらしく発展させるために、あくまで抑制されるべきものである。日本における研修会においても常に問題点になっている。

◇日本の審判員が世界選手権大会やオリンピック大会に審判員として参加することができるかどうか

今回二名が参加することになったのは、このことを実現させるための一つの方法であった。日本の審判員の笛を見せることによってこのことの実現を早めようという意図があった。日本の地理的な宿命は、ここでも大きなハンディキャップである。しかしこれは万難を排して近い将来に実現させなければならないことである。

◇研修会のあり方について

研修会そのもののあり方は、日本におけるものと同様であるが、実技研修が充分に組みこまれている点は、ともすると座学の多くなっているわれわれの研修会は大いに反省し、参考にしなければならないところである。 （了）

審判、コーチの講習会

IHF(国際ハンドボール連盟)は、このほど、今年内にコーチ(トレーナー)、レフリーの「国際シンポジウム」を開く計画を明らかにした。

時日、会場など詳細は未定である。

合繊糸・合繊混紡糸

田村紡績株式会社

社長 田　村　正　衛

四日市市東茂福町10－17
TEL 0593－65－2156（代表）
郵便番号　512

理事長登壇 ⑫

東京都クラブ連盟理事長

村田　稔

　5年前の秋、東京都ハンドボール選手権が駒沢屋内競技場で開かれた時、新しい試みとして男子は一般（大学、実業団）とクラブに分かれて競うことになった。この反響は大きく初めての企画ながらクラブの部には13チームが参加、トーナメントに於て戦かった。これがキッカケとなり一九七一年に東京都協会のお力添えの許に「都クラブ連盟」が誕生した。当時の加盟チーム数は男子十一、女子チームで、会長に外山准二氏、理事長に星野賢浩氏と、球界の大先輩をわずらわし今年4年目を迎えようとするに至っております。此の間、チーム数は男子が二十一に伸び、役員も新旧交替、理事長に小生が推されたほか各クラブ代表者が理事の任に当たるようになりました。東京におけるクラブ連盟の歴史はわずか三年でありますが、クラブチームは相当以前から存在し、慶応（三田ク）、早稲田（稲門ク）などはすでに戦前からの伝統を誇りこのほか十五、六年の歴史をもつクラブチームが数多くありました。これらのクラブは都民大会、都選手権大会等に出場して活躍をする一方、クラブ同志の交流試合を行ない、徐々に社会人、中学、高校、大学のＯＢ、同好会等のチームができ、連盟を組織するまでのかたまりになったもので、今後ますます大世帯になりそうです。都クラブ連盟としての行事は、春に行なう関東クラブ選手権都予選と、六月から十月にかけて行なうクラブリーグ戦の二つが主なものです。そのレベルは関東選手権で女子が二連勝（47年＝小平ＯＧ、48年＝東花ク）を遂げているのに対し男子は47年の二位（松門会）が最高。加盟数とは逆に圧倒的に女子が優勢であり、ウーマンリブの嵐が吹きまくっていると云えます。ところで最近の日本ハンドボール界は内外の動きともなかなか活発ですが、やはりハンドボール競技の大衆化を真剣に考えねばならないと考えます。ハンドボールの技の高度化はめざましく、私が親しんだ頃とは、天と地の違いがある。トップと底辺の技術差は開くばかりです。その意味で国体や地方大会（都民大会）等における競技で実業団及大学チームとクラブチームを混合して組合せをつくり試合を行なうことに対して納得がいかない。クラブチームはメンバーそれぞれの職場も異なり、環境、時間、経済的にも恵まれていない。ごく少数のクラブを除いては、どのクラブも「ハンドボールを楽しむこと」をモットーにしており、競技力のみを追い求めるチームとは趣旨を全く異にしている。後者ももちろん大切だが私はハンドボールが大衆化するためには「クラブ」の活動こそ不可欠だと信ずる。そうしたクラブがなにかの大会に登場した場合クラブのみで試合をさせる工夫はできないものか。練習条件の違いで技術練習に重点がおかれ基礎技術、体力の遅れから事故につながる発生も心配されます。

　また、ハンドボール関係者は底辺拡大を叫びながらともすれば、高校以上に目をやりがちですが、中学球界の拡充をた果すことこそ大事なことではないかと思います。現在クラブの主体となっているのは高校ＯＢチームですが、これらの選手が高校に入ったときは素人の集まりであり、さらに高校選手の内大学進学等で残る者は非常に少なくなり、しかも技術的には三年間のものしかありません。この様な流れがクラブチームの低調につながるわけでもし中学ＯＢを単位としたクラブが増えるようになればクラブ界も様相を変えてくるでしょう。

　頂点に立つチームの戦いがハンドボール技術の発展に寄与する活動なら、クラブのそれは〝市民活動〟であると考えます。

　だからといってクラブが、精神のみを強調して試合、競技力を軽視してよいものではありません。来る試合のために、少しでも欠点を補い、ハンドボールの醍醐味に触れられるようなゲームを行なう努力は必要です。しかし、クラブにとって、このことは、現在の条件下では難しく現時点では、やはり「楽しむ」ことを連盟の一貫とした方針に掲げているわけです。学窓を去ったかつての選手たちにもう一度ハンドボールへ足を向けさせる努力と一人でも多いハンドボール競技者を産む努力も我々〝クラブ関係者〟はしなければいけない。強化一辺倒からはなれたクラブとクラブ連盟にして、それは初めて成し遂げる事業であることを私は信じているし、すべての面で理解を日本ハンドボール界が示されるよう望むものです。

大同製鋼、4大タイトルを独占 男子

大同製鋼（愛知）が男子史上初の４大トーナメント優勝の偉業を遂げた。日本ビクター（茨城）が２年ぶりに女王の座へ返り咲いた――今年度の国内チャンピオンチームを決める第25回全日本総合選手権は昨年12月12日から16日まで東京体育館（開会式は11日・体協）に選び抜かれた男子16，女子12チームが参加，予選トーナメント，決勝リーグ方式によって覇を競った。（観衆＝第１日800，第２日600，第３日1000，第４日1400，第５日2600）

全日本総合 女子は日本ビクターに栄冠（2度目）

法大、三春台クに苦しむ

男子

▽予選トーナメント1回戦

湧永薬品（日本協推・大阪）34（18－9 16－7）16 海上自衛隊第3術科校（自衛推・千葉）

大崎電気（日本協推・埼玉）19（9－8 10－5）13 中京大（学推・愛知）

大同製鋼（実推・愛知）41（21－11 20－8）19 東京教員（開催地代表・東京）

法政大（学推・東京）14（6－6 8－7）13 三春台ク（全国社会人東地区代表・神奈川）

＝以上Aコート

本田技研鈴鹿（実推・三重）17（5－6 12－7）13 日体大（学推・東京）

大阪イーグルス（教推・大阪）19（10－6 9－8）14 三菱レ大竹（実推広島）

中央大（学推・東京）31（18－9 13－3）12 京都ク（全国社会人西地区代表・京都）

三景（実推・東京）27（13－7 14－9）16 スワロー兵庫（教推・兵庫）

＝以上Bコート

日体大1回戦で姿消す

○……Aコートでは学生チャンピオンの法大が冷や汗びっしょりの試合をした。法大は前半26分やっとの思いで7－5と優位に立ち、主導権を握るキッカケをつかんだかに見えたが、得意の組織プレーがまったく不調で、後半6分8－9と逆転された。

三春台クは、法大の単調な攻めをGK井上の堅守で阻んでは、じっくりと攻めたててポイントをあげる巧妙な試合運びだった。

法大は10分をすぎてから動きがさらに悪くなり、1点差（11－12）のまま、15分間無得点という貧攻、三春台クは22分尾島のゲットで13－11とし、法大ベンチは憂色濃かった。

しかし、残り5分となって学生－クラブの体力差が出た。26分井手26分20秒柳で13－13とした法大はタイムアップ25秒前井手が辛くも決勝点をあげた。法大のもたつきがあったにせよ、三春台クの健闘は賞してよい。

○……大崎×中京も見応えがあった。前半20分すぎまで互角の戦況から、大崎は25分7MT（荒井）で初めて3点差をつけ、そのあと飯田、前渕がたたみかけた。このあたりの試合運びはさすがにベテラン揃いだ。

後半、余力を残す中京の反撃に期待がもたれたが、6分までに2本の7MTをとられ7点のリードを奪われたのは痛かった。このあと夏目、佐藤らで大崎の攻撃をしのぐ場面もしばしばだっただけによけいである。

○……湧永×海上自衛隊は海上の試合ぶりに注目が集ったが、立ちあがり5分0－4と先行されてしまい、そのままのペース。三浦、平野、横山らが散発的に得点を返したにとどまった。大同×東京教員は前半15分までどうにか東京がもちこたえていたが、それ以後は大同のスピード、パワー攻撃で一方的な展開となった。

○……Bコートでは1回戦屈指の好カードとみられた本田×日体大が期待はずれの凡戦。先手は日体がとったが、本田は長谷川が要所で好シュートを決め優位に立ち、21分7－6のあとは、学生のお株を奪う気力にあふれた速攻で相手ゴールを襲い一気に5点差をつけた。

日体は後半4分1点を返したがすぐに2点を奪われるなど雑な試合ぶりで、本田のまとまりに屈した。日体大（レギュラー）が全国的なトーナメントの1回戦で姿を消したのは、昭和12年創部以来初めてのことではないだろうか。

○……三菱レ大竹が大阪イーグルスに食い下った。先行する大阪を追う三菱は22分6－6から岩本のゲットで初めてリード、しかし大阪は残り2分で高橋が7MTと連攻を決めて再び逆転した。

ベテランを揃えた大阪はこの優位を後半開始直後に持ちこんで1 20分秒福井、2分安達で11－8、三菱も6分に1点差と詰めたが、そのあとの好機を相手GK本田の冷静なプレーに捌かれて10分間無得点、この間に2点を許したのが結果的には勝負をも色分けた。敗れたとはいえ三菱の成長がうかがえた一戦である。

○……慧星同士・三景×スワローはスワローが思いのほかプレーにまとまりがなく前半15分7－2と三景がリード、スワローは20分6－8と迫ったのがせいいっぱい、あとは佐々木、高梨を主力とする三景の多彩な攻撃に押しまくられた。

中大×京都クは中大が立ちあがりから20分までに連続11ゴール、あっさり勝負を決めてしまった。

湧永、本田守備陣を突く イーグルス、大崎降す

▽同2回戦（決勝リーグ進出チーム決定戦）

湧永薬品 19（5－7 14－7）12 本田技研鈴鹿

○……優勝争いにひびく一戦。五分の立ちあがりから湧永は16分木野、17分7MT（高橋）で8－4としたのが大きかった。その前、本田は2－6の劣勢から2点を返し波にのりかけたところである。

全日本実業団（7月）で16－14

国体（10月）で13－12と連勝している本田はそれでもなお逆転に自信をもっていたようだ。しかし攻めへの気持ちばかりが先に立ち守りがあまりにももろすぎた。前半終了前90秒間に3点を失うなどもったいなさすぎる。

後半の攻撃は、湧永よりもむしろ本田にみるべきものが多かった。

それだけに、前半の守備の乱れは惜しい。（杉山　茂）

大阪イーグルス 10（5－5、5－2）7 大崎電気

○……最初の10分間は2点をあげた大阪、そのあとの10分間は大崎が4点を連取。調子の波が往ったり来たりする前半を終え、勝負は後半に持ちこまれた。

後半19分まで7－7、このあと大阪は、大崎のわずかなスキをついた高橋の巧技で8－7、さらに30秒後速攻から早川が決め9－7と貴重な勝ちこし点をあげた。大崎にも得点機はあったのだが、当りの強い大阪ディフェンスを切りこめず、巧く突破した場面も、シュートをGK本田に阻止されて13分以降ついにノーゴールに終った大崎のこのような〝早期敗退〟は初めての記録だろう。（杉山）

大同製鋼 23（12－11、11－9）20 中大

○……中大は5分すぎからすばらしい攻撃で上村、蒲生、山村らが大同の堅陣をつぎつぎと破り6点連取、15分8－2という好スタートだった。ところが20分をすぎる頃から守りに粘りをかき点差を詰められ28分には10－11と逆転されてしまった。

後半も乱戦気味だったが、大同は10分14－13から3点をあげて主導権を握り、27分には22－16とはなして勝負を決めた。

中大の序盤の勢いが、もう少し保たれればさらに面白くなったろうが、ベテラン野田の相変らずの好リードから一気に攻めたてる大同のプレーは自信にあふれ〝一枚上〟の感じだった。（根城　泰＝本誌編集委員）

法大 17（9－7、8－6）13 三景

○……前半6たび同点のあと法大は24分長谷川、26分井手のゲットがありリード、三景もひるまず、後半7分までに3－1のポイントでタイ（10－10）、緊迫した。

しかし、動きに優る法大は9、13分川島の連続ゴールと16分井手で3点差をつけ、このプレーが勝因となった。三景は試合開始早々佐々木が負傷、退場してしまい、攻撃の歯車が狂ったようだ。このロスが敗因といえる。（根城）

歴代チャンピオンチーム

	【男子】	【女子】
昭12	大塚ク	……
昭13	日体	……
昭15	日体	倉敷高女
昭17	日体倶	倉敷高女
	（以上，戦前の全日本選手権）	
①昭24	日体桜	愛知ク
②昭25	スワロー松	全山梨
③昭26	スワロー	芙蓉ク
④昭27	セントポールA	（休会）
⑤昭28	全日体大	全静岡城北高
⑥昭29	全日体大	全静岡城北高
⑦昭30	西日本日体OB	水海道二高
⑧昭31	全日体大	半田高
		（以上11人制）
⑨昭32	全日体大	愛知紡績
⑩昭33	全日体大	愛知紡績
⑪昭34	芝浦工大	愛知紡績
⑫昭35	芝浦工大	愛知紡績
⑬昭36	芝浦工大	愛知紡績
⑭昭37	大崎電気	愛知紡績
	（以上11人制）	
⑮昭38	立教大	大洋デパート
⑯昭39	大崎電気	大崎電気
⑰昭40	大崎電気	大洋デパート
⑱昭41	全立教	大崎電気
⑲昭42	大崎電気	田村紡績
⑳昭43	全立教	大洋デパート
㉑昭44	全立教	大洋デパート
㉒昭45	大崎電気	大洋デパート
㉓昭46	大崎電気	日本ビクター
㉔昭47	湧永薬品	東京重機工業
㉕昭48	大同製鋼	日本ビクター

第25回全日本総合選手権 審判団

安藤純光（審判長）、清水正（副審判長）、東嘉伸、加藤雅之、狩野幸介、金原至、光島磯雄、森恭一、岡前義春、岡本克彰、大塚文雄、佐野和夫、斎藤和夫、柳沢民弥、柳井文治、由利弘

法大に社会人の壁厚し

▽決勝リーグ

大同製鋼 20（10－2、10－9）11 大阪イーグルス

	【大阪】	得
GK	本田	0
	広川	0
FP	高橋	1
	池本	2
	安達	1
	市田	0
	早川	0
	福井	4
	樫塚	1
	河原崎	1
	木村	0
	北岡	1

	【大同】	得
GK	柳川兄	0
	倉谷	0
FP	野田	2
	藤中	6
	加藤	2
	中井	0
	松原	2
	花輪	3
	柳川弟	5
	北村	0
	守田	0
	東谷	0

20（3）7MT（2）11

○……大同は前半3分花輪の7MTで先制、その後も藤中の鋭いカットインからのシュートなどで着々と加点、11分には5－0とした。イーグルスも小さなパスをつないで決して不調ではなかったが大同の高く厚いディフェンスを崩せず13分高橋、21分福井が得点したにとどまり、前半で勝負がついた。

後半も大同のペース。10分には14－2と大差がつき、花輪がGK本田と激突し救急車で運ばれるア

クシデントも、交代した柳川弟がすばらしいデキでその穴を埋め完勝した。（根城）

湧永薬品 20（8－7, 12－3）10 法大

【法大】		得
GK	柴田	0
GK	森田	0
FP	長谷川	0
FP	橋本	0
FP	井手	0
FP	川島	3
FP	上滝	1
FP	村田	2
FP	川村	0
FP	荒井	0
FP	矢島	0
FP	青山	4

得	【湧永】	
0	今井	GK
2	市原	FP
1	木野	FP
3	森	FP
6	高橋	FP
4	戸田	FP
4	田中	FP
0	菅	FP
0	松井	FP
0	藤井	FP
0	大山	FP

20（4）7MT（2）10

○……立ちあがり1－1のあと湧永守備陣のカットプレーがさえ、常に2点連取しては法大が1点というペースで進展、湧永の完勝かにみえたが、法大は20分すぎから青山のサイドシュートと村田の絶妙な配球で反撃、1点差に詰め後半に興味をつないだ。

波にのった法大は後半3分青山のゲットで8－8と追いつき互角の戦況となった。

しかし、法大はこのあとの7MTを失敗したことから、湧永に再び活気がもどり、11分9－9から高橋、木野、田中、森らが一気に5点を連取、大勢が決まった。

法大は、11分以後1点だけでは勝利はとても望めなかったがここらあたりが"力の差"といえるのかもしれない。湧永のきれいなゲーム運びは好印象を残した。

（森　恭一）

大同製鋼 30（16－3, 14－10）13 法大

【法大】		得
GK	柴田	0
GK	森田	0
FP	柳	8
FP	長谷川	1
FP	橋本	0
FP	川島	2
FP	村田	2
FP	上滝	0
FP	青山	0
FP	井手	0
FP	荒井	0
FP	川村	0

得	【大同】	
0	柳川兄	GK
0	倉谷	GK
7	藤中	FP
4	中井	FP
7	柳川弟	FP
5	松原	FP
1	加藤	FP
0	北村	FP
0	守田	FP
0	更谷	FP
6	野田	FP
0	桐山	FP

30（2）7MT（1）13

○……60分間を通じて終始衰えることなき大同の攻防はあらゆる面で法大を上廻り、圧倒の強味を示した。

大同製鋼（攻）×大阪イーグルス。大同・加藤のダイビングショット（撮影・山田真市）

シュート力に例をとっても倒れこみ、スタンディング、ジャンプという大同の多彩さに対し、法大は柳に偏る単調な攻撃に終始、大同ディフェンスを破れなかった。

実業団界と学生界の格差と云ってしまえばそれまでであるが、法大をはじめ学生チームは今後シュート力向上と攻防の厚味を増した目標をとるべきであろう。

特に法大の場合、村田という秀れたゲームメーカーが居るだけに、決定的な力をもつゲッターが居れば、いっそうチーム力はアップするであろう。（光島磯雄）

湧永薬品 16（6－6, 10－2）8 大阪イーグルス

【大阪】		得
GK	本田	0
GK	広川	0
FP	早川	2
FP	福井	1
FP	安達	0
FP	高橋	1
FP	池本	2
FP	河原崎	2
FP	足羽	0
FP	市田	0
FP	樫塚	0
FP	北岡	0

得	【湧永】	
0	今井	GK
6	高橋	FP
1	森	FP
1	戸田	FP
3	田中	FP
1	市原	FP
4	木野	FP
0	菅	FP
0	藤井	FP
0	松井	FP
0	大山	FP

16（3）7MT（1）8

○……ベテランが多くしかも両チームとも相手の手の内を充分に知りつくしているということで、スローペースでゲームは進んだ。イーグルスは当りの弱い湧永ディフェンスを早川、高橋、池本らがうまく破り14分4－0とリードしたが、湧永も木野・田中らのシュートで反撃、ハーフタイム直前6－6の同点に追いついた。ペースを取り戻した湧永は後半開始直後高橋のシュートで逆転、木野が得意のミドルシュートを決めて徐々にリードを奪っていった。

イーグルスは、後半10分あたりから疲れがのぞき、相手GK今井の好守にもあって結局後半は河原崎が6、25分にあげた得点だけで押し切られた。（根城）

大阪イーグルス 21（11－7, 10－8）15 法大

【法大】		得
GK	柴田	0
GK	森田	0
FP	柳	1
FP	村田	4
FP	川島	4
FP	井手	1
FP	上滝	2
FP	長谷川	1
FP	橋本	0
FP	荒井	0
FP	川村	0
FP	青山	2

得	【大阪】	
0	本田	GK
0	広川	GK
7	福井	FP
5	高橋	FP
3	池本	FP
2	安達	FP
1	河原崎	FP
3	早川	FP
0	市田	FP
0	足羽	FP
0	樫塚	FP
0	木村	FP

21（3）7MT（0）15

○……優勝の望みを失ったとはいえ教職員、学生のチャンピオン同士。注目の対戦だったが、守りの差がいきなりあらわれ、イーグル

投書欄　明日への提言

ジャパン・カップ実施を

機関誌を読む限り、日本ハンドボールリーグの実現はとうぶん望めそうになく、わずかに実連が、サーキット化を果たした程度に終わりそうである。

そこで、実連、学連、教職員連、自衛隊連の首脳陣に提案したい。日本協会にさきがけて、4者の話し合いによって、各選手権の優勝チームによる2回総当り戦を行ってもらえないか。ゴルフのマスターズのようなもので、ジャパン・シリーズでもよいし、ジャパン・カップでもいい。ヨーロッパにおけるヨーロッパカップを模して「カップ」という名称が日本では新鮮な響きがあると思う。

全日本総合の勝者と、このカップの勝者とどちらが権威があるか、といった世論がわいてきたらしめたものだ。日本協会も、日本リーグ発足へ踏み切ることになると思うからだ。

四組織関係者の研究と努力を切望する【東京・磯部　晃　27才、会社員】

スは15分6－1と大差。途中、法大は6－8（22分）、11－13（後半10分）と2度ほど反撃の気勢を示したが後続なく、味気ない試合で終ってしまった。

イーグルスはクラブチームにはめずらしく、つねに最上位の成績を目標とした覇気のあるチーム、練習量にも制約があり、それだけに一つ一つのプレーにムダを許さぬ訓練が行き届いている。

3週前の全日本学生優勝で一息ついてしまったような法大は、気力でもイーグルスに負けていたような感じだ。（杉山）

大同いきなり10ゴール

大同製鋼 21（12－4 / 9－9）13 湧永薬品

○……大同の中浜監督は、四冠王をかけた試合を前に緊張気味の選手たちに「ファイトを燃やし、各自が持ち味を生かした、ネバリ強いゲームをしろ」とハッパをかけた。

持ち味を生かしたゲーム―その先陣を切るように野田、藤中が立ちあがりから、まるでコマねずみのように走り、湧永DFをゆさぶった。この両ベテランの動きに若手も引っぱられるように素早いパスワーク。2分、速攻から野田が先取点を奪うと、すっかりリラックス、ゲームを自己ペースに持ち込んだ。そして4、5分には花輪、松原が加点するなど、21分までに速攻につぐ速攻で連続10ゴールをきめてゲームを一方的にした。

得	【大同】		【湧永】	得
0	柳川兄	GK	今井	0
0	倉谷			
3	中井	FP	戸田	1
3	花輪		森	1
5	藤中		木野	3
1	加藤		市原	3
5	松原		高橋	3
2	野田	（審・佐野 岡前）	田中	0
1	柳川弟		藤井	2
1	北村		菅	0
0	守田		大山	0
0	更谷		松井	0
21	（2）	7MT	（1）	13

これに対し、湧永は大同の猛攻にドギモを抜かれたような感じ。森、高橋を走らせ、大同DFにゆさぶりをかけようとするが闘志不足。中井、花輪の相手の動きをよくみたマークに手も足もでない。闘将・木野の「元気を出せ」の再三の掛け声に、やっと態勢を立て直すと、21分に三十一歳のベテラン市原のシュートで1点を返した。

その後も高橋の7メートルスロー、市原の連続シュートなどで3点をあげ、一時は追いあげ態勢を作りかけたが、後半、前半5得点を奪われた藤中をストップしようと、マンツーマン・マークしたのが悪く、ポストが空いてまたも大同の加点を許してしまった。

四冠王にかけた大同の立ちあがりの闘志が、勝敗を分けたともいえる一戦であった。（大国拓哉・読売新聞社運動部）

優勝メダルの裏側

大同製鋼

□……「またこんなに持って帰るのかぁ」、並べられた優勝賞品を眺めながら若手選手がうんざりしたような声を出した。なんともぜいたくな話である。

もともと強気揃いのチームだ。今年はシーズン初めから自信満々慎重な中浜大輔監督までが「4冠王を狙ってます」と豪語していたほど。公約どおりの快勝だった。

□……一昨年あたりから直線的でダイナミックなスピード攻撃がチームカラーとして定着、そこへ今年は積極的な欧州型のディフェンスを全員が身につけた。鬼に金棒である。

ここまでなるにはさぞかし平生の練習が、と思うのだが、どんな時でも終業後の午後7時から2時間と決まっている。短い時間に能率をあげるため一つのシュート一つのパスに〝心〟を注いだのが、この強さに実った、と中浜監督は云う。

□……11年前、社内の同好者を集め、名古屋港の一角で細々とあげた産ぶ声。それが今は「優勝」に馴れた若手のはしゃいだ声に〝成長〟している。「大同時代」はしっかりとした足どりで幕が開けられたといえるだろう。

日本ビクター

□……〝留守番優勝〟であった。

速攻の主役・高野が世界選手権へ旅立つ時、見送りに来た選手たちは「全日本総合はまかしといて……」と口々に云っていたものだ。

監督の池田鉄哉氏も見学のため同じ飛行機で日本を発った。

□……順調に勝ち進むこのチームに、大会終盤もう一つ留守番の役目がまわってきた。

「日立栃木の快進撃阻止」―欧州へ主力を送った東京重機、田村紡が相次いで勝利をあげることなく日立の前から去り、大洋デパートも炎を見せずとあって〝先輩チームの面目〟は最終日の日本ビクターにかかったのである。

□……「初出場のチームに優勝をさらわれてはかなわない。他のチームの分もふくめて姉さんチームの実力を見せなくては―」とばかり一気の先制攻撃で快勝。

「約束を果たせたわ」と喜ぶ選手たちをねぎらうのは峰岸正之監督。

実は彼も、池田氏と芝浦工大同窓のよしみで岐阜からかけつけてこの大会だけさい配を揮った〝留守番役〟だった。（杉）

日立旋風、東京重機(前回優勝)巻きこむ

女　子

▽予選トーナメント1回戦

東京重機(日本協推・東京) 17(11―0 6―5)5 武庫川女大(学推・兵庫)

田村紡(実推・三重) 14(7―4 7―4)8 日体大(学推・東京)

日本ビクター(次年度国体開催地代表・茨城) 14(6―4 8―3)7 東北ムネカタ(実推・福島)

＝以上Aコート

日立栃木(実推・栃木) 14(5―6 6―5 : 2―1 1―0)12 東京学芸大(開催地代表・東京)

大崎電気(実推・埼玉) 10(5―4 5―4)8 小松市立女高(高体連推・石川)

ブラザー工業(実推・愛知) 17(9―3 8―4)7 東京教大(学推・東京)

＝以上Bコート

○……Aコートは3試合ともあまりに順当すぎた。わずかにビクター×ムネカタが、前半ムネカタの健闘で激しいせりあいとなっただけ。それも後半になるとビクターがいきなり7点を連続して取り15分には14―5。

学生1位の日体大は田村紡に対して積極的な攻撃を仕掛けたものの、チャンスをつかんだあとのスピードで差があらわれ、後半5分4―10とされ、そのあとの反撃も空しかった。武庫川女大も重機の若手に走りまくられなすすべがなかった。

○……これに対しBコートは熱気にあふれていた。

特に小松市女高の試合ぶりは男女を通じこの日一番のハイライト。

離しても離しても追いかけてくる小松の粘りに大崎はたじたじ。

小松市女高の元気な攻撃に大崎電気もたじたじ

（撮影・山田真市）

後半1分小松は3度目のタイ(5―5)。大崎は先行するがすぐ取られ10分をすぎる頃から緊張のあまりまったく動きが止まってしまった。

こうなると「胸を借りる」ムードの小松が有利、15分中川のみごとな倒れこみで8―7と初のリード。スタンド、コートサイドは沸きに沸いた。

残り10分。高校女子にとって試合時間が40分をこえることはない。

1点リードした状態で〝未知の10分〟に入る小松セブンへのプレッシャーは計り知れないものがあったろう。はたして17分8―8とされ、あと5分となってさしもの小松の気力の糸にもゆるみが出た。21分、それまでほとんど見せたことのない苦しまぎれのパスは、大崎のカットに会って岩井にゴールを割られた。あと4分を残していたが誰の目にもこれは決勝点であった。

○……東都初登場の日立が東京学芸大を降した一戦も面白かった。

日立は前半動きが鈍く、射つシュートも腰がすわっていない。学芸大は学生界で場数(ばかず)を踏んでいるだけにそつなくポイントをあげた。

特に前半20分までに初見、安藤の活躍で6―2とした時は、そのまま突き進むかにみえた。

ところが、日立はそのあと急に動きが滑らかとなり、木村の好判断からあっという間に点差をつめ後半4分同点、5分逆転(7―6)15分には11―7とするほどの勢いをみせた。学芸大もひるまず16分以降、相手のミスから好機をつかみ山田の連続3ゴールと、タイムアップ寸前永沢のゲットで振り出しへ戻した。延長後は日立が山井の2得点で先手をとり、これが利いた。学芸大も7MTで1点を返し粘ったが、日立も後半ダメ押しをして勝った。

○……ブラザーは優勝候補らしく宮崎、藤井を中心としたまとまりのある攻撃と当りの強いディフェンスで畑中に頼る東京教大を突きはなした。

ビクター、ブラザーに制勝
田村紡も大崎を降す

▽同2回戦(勝者は決勝リーグ、敗者は4～6位決定リーグへ)

田村紡 12(7―5 5―0)5 大崎電気

○……田村紡は前、後半を通じて攻防の巾広さとタテの厚さで大崎を圧倒し、得点のほとんどがミドルのジャンプシュートであったことが印象的である。

大崎はボール廻しに気をとられすぎてカットインがみられず、田村の防禦を楽にしてしまい、しかもシュートに決定力を欠き田村GK久保に阻まれた。それでも前半の点差は2点だったのだから、後半奮起すれば勝機もあったハズだ。

それが零封に終っては、気力に欠けるといわれてもやむを得ない。（光島）

日立栃木 13(3―5 4―2 : 2―1 0―1 : 4―1 0―1)11 東京重機

○……勝利が決まったとたん、日立セブンはコート上で泣きだしてしまった。それほど嬉しく、苦しい勝利だった。

後半残り7分で5―7と重機がリードを奪った時はいくら終盤に自信をもつ日立といえども追いつくのは難しそうにみえた。

ところが18分木村、18分40秒鈴木昌で7―7としたのだ。さすがにそのあとは重機も粘り、日立も追加点まではあげられなかった。

第1延長は一進一退で結着がつかず、第2延長（本大会では3年ぶり）に入ると体力差が出た。この1年間はともかく「走ることだけ」（阿部コーチ）という日立が開始2分間に7MTを含む3連続ゴールをあげ、4分1点を返されたものの、すぐに加点して3点差をキープ、後半の5分間も1失点におさえ、ついに初出場で、前年度チャンピオンを破る大波乱を呼びおこした。全員が殊勲者だが、とりわけGK粂谷の好守は光った。

重機は牧野、古佐原を世界選手権に送っていたため勝負どころでこのハンデがひびいた。（杉山）

日本ビクター 12（6－3、6－1）4 ブラザー工業

○……立ちあがり2―0とビクター先行からしばらく膠着状態。10分をすぎてからブラザーは宮崎がステップから好シュートをとばしさらに藤井の巧技で19分3―2と逆転したのだが、20分すぎ再びビクターの速攻が冴えて主導権を奪い返された。

後半はビクターが蓮見、谷沢でブラザーのディフェンスを突破、10分までに点を積み重ね大勢を決めた。決勝リーグ出場をかけた試合にしては緊迫感に乏しく、有力チーム同士ならもう少しゴールに対して攻防両面で執着心をもって欲しいものである。（荒川清美）

ブラザー、4位を確保

▽4～6位決定リーグ

ブラザー工業 14（6－5、8－1）6 東京重機

得	【ブ工】		【重機】	得
0	井戸田	GK	三紙	0
0	山本		杉原	0
0	藤浪	FP	市川	3
1	原川		鈴木	0
0	平		菊地	2
4	宮崎		折口	1
4	藤井		村上	0
1	鍋島		山口	0
0	佐々木		岡部	0
2	小森		波多腰	0
0	国府田		渡辺	0
2	鈴木		町田	0
14	(2)	7MT	(0)	6

東京重機 11（8－4、3－3）7 大崎電気

得	【重機】		【大崎】	得
0	三紙	GK	西村	0
0	杉原			
3	市川	FP	佐藤	4
2	鈴木		岩井	2
0	菊地		席定	0
0	折口		長谷川	0
2	村上		大橋	1
1	山口		深堀	0
0	岡部		安野	0
0	波多腰		内野	0
0	渡辺		永藤	0
3	町田			
11	(1)	7MT	(1)	7

ブラザー工業 10（4－1、6－5）6 大崎電気

得	【ブ工】		【大崎】	得
0	井戸田	GK	西村	0
0	山本		[illegible]	
1	藤浪	FP	佐藤	4
1	鍋島		席定	0
0	平		岩井	1
0	原川		安野	0
7	宮崎		大場	1
1	藤井		内野	0
0	佐々木		長谷川	0
0	小森		永吉	0
0	国府田		深堀	0
			永藤	0
10	(0)	7MT	(3)	6

田村紡、2試合とも分ける

▽決勝リーグ

日立栃木 8（2－4、6－4）8 田村紡
引き分け

得	【日立】		【田村】	得
0	粂谷	GK	久保	0
0	本城		岡	0
4	木村	FP	沖	0
0	鈴井		辻	1
0	小林		金田姉	1
1	富田川		横山	2
1	小根沢		松下	4
1	土屋		鈴木	0
1	山井		和久井	0
0	桜庭		落合	0
0	田村		笠	0
0	鈴木		金田妹	0
8	(0)	7MT	(1)	8

○……決勝初進出の日立の固さを田村紡は巧くついて6分横山のゲットを口火に松下、辻らで順調に得点を加えた。

ところが後半になると得意のクイック攻撃がまとまらず、逆に落ち着きをとりもどした日立に走りまくられ、あっと云う間に5―4と逆転された。

一進一退から日立は16分木村のゲットで7―6と先行、21分同点になったが、すぐに富田川が射ちこんでそのまま逃げ切るかと思えた。しかし、田村紡も必死の反撃を試み23分40秒ローリングから松下がシュートを決め辛くも引き分けた。日立は小さなミスはあるが後半全員が思い切ったプレーをみせた積極さで相手を上廻り、田村紡としてはむしろ拾いもののドローと云える。（杉山）

田村紡 4（4－1、0－3）4 日本ビクター
引き分け

得	【田村】		【日ビ】	得
0	久保	GK	渡辺	0
0	岡		鈴木	0
0	沖	FP	池田	2
0	辻		阿部	0
3	金田姉		蓮見	1
1	松下		谷沢	0
0	横山		額賀	1
0	和久井		滝	0
0	鈴木		川崎	0
0	落合		加藤	0
0	笠		滝本	0
0	金田妹			
4	(1)	7MT	(0)	4

○……前半のビクターはまったく不調、出足のある田村紡守備陣に動きを止められ14分額賀の1点だけ。一方の田村紡は11分7MTを決めた金田姉が気をよくし、発らつと動いてチャンスをつくり13分には松下が豪快なシュート、20分すぎには金田姉の連続ゴールで優位に立った。

後半になると様相は一変。ベテラン池田を投入したビクターはがぜん鋭さをとり戻して5分速攻から蓮見、さらに10分、18分には池田が巧みに田村ディフェンスをかわす攻撃でシュートを決め4―4に持ちこんだ。この間田村紡は打つ手打つ手がすべて実らず、ついに無得点という不振で、前半せっかくのリードをムダにしてしまった。（荒川）

日本ビクター 11（7－1、4－6）7 日立栃木

得	【日ビ】		【日立】	得
0	渡辺	GK	粂谷	0
0	鈴木		高橋	0
2	阿部	FP	木村	3
2	蓮見		鈴井	1
1	谷沢		小林	1
5	額賀		富田川	1
1	加藤		鈴木昌	1
0	滝		鈴木幸	0
0	川崎		山井	0
0	滝本		小根沢	0
0	池田		土屋	0
			桜庭	0
11	(3)	7MT	(0)	7

○……「前半走るだけ走って、点差を広げて優位に立つ」（峰岸代理監督）というビクターの作戦が図に当った。ビクターは立ちあがり「ランニングには自信がある」という日立のお株を奪うように速攻の連続。これにはチーム結成九カ月と試合経験の浅い、日立はビックリ。その攻めにふりまわされ、ゲームを荒っぽくした。おかげでビクターは18分までに額賀の3本の7メートルスローを含んで点を連取するなど、前半で大きく差をつけた。

一方、日立は後半、大量得点による気のゆるみがみられるビクターのスキを巧みについて反撃、7分から11分までに速攻で4点をばん回、10―6と追いあげた。日立は今大会三試合連続して、前半の劣勢を後半一気に吹き飛ばし、ここまでコマを進めてきただけに、残る14分のゲーム運びに期待がかけられた。しかし、ビクターの試合運びには〝一日の長〟がある。ここでベテラン池田を投入、気を引きしめると、素早い帰陣、徹底したスロー攻撃で、日立のペースをくずして逃げ切った。

日立は初出場――前日まで、無欲で旋風を巻き起してきたが、この日は勝てば優勝という大一番になっただけに、やはり立ちあがり欲が出たのか、これまでと違ってコチコチ。これが最後までたたった。（大国拓哉）

全日本総合選手権に拾う

躍進・日立栃木に恩人の影

◇……「そうだ、きっと小島浩さんの霊がコート上で選手たちを後押ししているんだよ」

日立栃木の桑名照雄監督と阿部徳之助コーチは、自分たちが大の男であるのを忘れて、真顔でこう話しあい〝結論〟づけた。

小島さんはこのチームの生みの親。従業員五千人、スポーツのさかんな工場だが、武蔵のバレーボール、戸塚のバスケットボールのような〝シンボル〟がない。そこで小島さん（当時、総務部長）が中心となっていろいろなスポーツをリサーチした結果「将来性、国際性のあるハンドボールを、ということになった」（桑名監督）

◇……選手を集め、練習場をつくり、チームが軌道にのりかけた昨年5月、小島さんは「急性心臓死」で40才の人生を突然閉じた。まだ一試合もせぬうちであった。

1年目は徹底した体力づくり、2年目に技術を上のせ、3年目でAクラス入りという計画が、前回優勝の東京重機を破るおまけまでつけて、堂々、優勝戦線へ駒を進めたことは関係者にとって〝不思議な力〟の作用があったとしか思えないのだ。

◇……日本ビクターに惜敗したあと、（＝カット写真）選手たちは、ベンチに飾られた小島さんの遺影の前で、来るべき日の優勝を誓った。「スポーツの世界は甘いものじゃないよ、君たちはまだまだ努力しなければいけないぞ」。優しかった小島さんの初めて見せたけわしい表情がそこにあった……。

大同、国内チームに負けず

◇……男子で史上初の全日本4大トーナメント（NHK杯、全日本実業団、国体、全日本総合）優勝という快挙をとげた大同製鋼。

カメラマンのフラッシュを浴び記者団の質問攻めに会っていたが、自信にあふれていたせいか、あまり興奮した様子もなかった。

◇……4冠王の偉業は、女子では愛知紡～現在廃部～(昭和36年度)田村紡（42年度）、大洋デパート（44、45年度）がマークしているが、男子では芝浦工大が34、36年度に全日本学生王座決定戦～現在廃会～を含めた三大タイトル独占という記録があるだけ。

しかも、大同は、一昨年12月以来73戦69勝3分1敗という高勝率その1敗も昨秋9月のユーゴ戦で、国内チームにはついに1年間土をつけられなかった。3引分のうち一つは、愛知実業団リーグ（9月）で、新人で固めた大同星崎戦。いわば二軍とのものだ。「ウチのチームの層の厚さが判るでしょう」と藤中憲二主将は胸を張っていた。

年中無休の猛練習 小松市女高

◇……唯一の高校チーム・小松市立女高の奮戦は序盤のハイライト。

これまで2回の優勝経験をもつ大崎電気（全日本実業団6位）と四つ相撲を演じ、8－7とリードを奪う場面（後半15分）さえあった。

高校女子の代表が〝大会荒し〟なことは、最近の特色？。学生チームは高校と当たらないよう祈っている、といった話までまことしやかに伝わってくるほど。

◇……それにしてもこのチーム、よく練習する。すでに昨夏のインター・ハイ（四日市市）でそれは評判となったが、まさに寸暇を惜しんで投げ、走っている。

365日間休みなし、授業前に1時間、放課後2～3時間、汽車通学の部員もおり、一週2回は学校に泊って練習時間を延ばすという徹底ぶり。

◇……こんな猛練習ができるのは父兄の理解があるからだ。「強くなるにはあたりまえ」と割り切っており谷口監督がどんなに激しく指導することも公認になっている。

千葉国体(昨秋10月)で優勝した時、選手たちは、まっ先に付き添って来た父兄を胴上げした。「感動的なシーンだった」と日本協会・荒川理事長はその模様を話す。

◇……惜敗のあと、谷口監督が「パワー、スピードがやはり違いました。選手たちはあれが精いっぱい、よい勉強になりました」と話しているかたわらで「パスさえもう少しうまくつながれば…」と中川しげみ主将はいつまでもくやしそうな顔をしていた。

外人も観戦

第4日のスタンドにめずらしいお客様が居た。スウェーデンから商用で来日したフヨルク・イエンセンさん夫妻で若い頃、マルモ市のクラブでハンドボールに親しんでいたことから今でも熱心なファン。ホテルで読んだ英字新聞で大会の開催を知り、都内見物の予定を変えて会場に足を運んだ、という。

「一九七一年スウェーデン（男）が日本に遠征した時、日本はスピードがあると新聞に出ていたのを思い出しました。東京でハンドボールを見れるとは……」と云い乍ら、漢字の並んだプログラムをだいじそうにポケットへしまいこんだ。

男子決勝リーグ	同	湧	イ	法	P	得	失
①大同製鋼	×	○	○	○	6	71	37
②湧永薬品	●	×	○	○	4	49	39
③イーグルス	●	●	×	○	2	40	51
④法大	●	●	●	×	0	38	71

女子決勝リーグ	ビ	田	日	P	得	失
①ビクター	×	△	○	3	15	11
②田村紡	△	×	△	2	12	12
③日立栃木	●	△	×	1	15	19

女子4～6位	ブ	東	大	P	得	失
④ブラザー	×	○	○	4	24	12
⑤東京重機	●	×	○	2	17	21
⑥大崎電気	●	●	×	0	13	12

〝会社再建〟へ元気な部員たち　大洋火災

昨年11月29日、延々8時間にわたって燃えつづけ、開店中のデパート火災ではわが国最大の惨事を招いた熊本・大洋デパートの大火は、同社の女子ハンドボール部が、国内最強チームで、事故当日も井監督と主力6選手が世界女子選手権（別掲）のため渡欧中とあって斯界にも衝撃を与えた。

さいわい、ハンドボール部員はこの日が休日で、合宿所に居たため不幸に見舞われなかったが、勤務先が焼けおち、何人もの同僚を失ったショックはあまりにも大きかった。

一方、渡欧中の大洋勢はパリでこの事故を知り、詳しい情報がすぐ入手できなかったことから、世界選手権を前に動揺、ユーゴに入ってから家族、部員の無事をようやく知った。

この間、日本協会も、熊本、フランス、ユーゴの3点に連絡をとりつづける慌しさ。大洋側の意向で井監督らの呼び戻しはさけられたが、一時は、荒川理事長も選手団の帰国（棄権）を考えたほど。

なお、部員たちは現在、本店の事務と支店の応援の二組に分かれ、〝会社再建〟に一生懸命である。部活動の〝今後〟は未定。

東ドイツ（男子）9月来日へ

日本体協からこのほど日本協会に伝えられた連絡によると、日体協の新事業「日本・東ドイツスポーツ交流」で、ハンドボールの実施が正式に決定、第1回として、今シーズン9月、東ドイツ男子の来日が確定的となった。

昨秋の話しあいでは、まず日本側の遠征を望まれていたが、経費の面で、日本協会は相手側の来日を希望、なりゆきが注目されていた。今回の連絡では、9月7日から10日間来日ということになっているが、日本協会は、1月12日の月例常務理事会（東京）で受けいれについて協議、会場確保などの点で9月初旬とすることを再要望した以外は、20名の招待を正式に決めた。

東ドイツのレベルは世界最上位で、男子は2月の世界選手権の最有力優勝候補、もし栄冠を握っての来日となれば、日本のファンへ、昨秋のユーゴシリーズにつぐ豪華なプレゼントとなる。

詳しい日程は、日体協などと調整後、2月10日の全国会議（東京）でまとめられよう。

荒川理事長の話　日本体協事業の一環であり、なんとか成功させたい。女子が世界選手権で優勝すれば男子よりもそのほうが強化のためにはよいと思ったが、9位に終ってしまい、こうなれば男子が、ワールドチャンピオンとなって来て欲しいと願っている。

シリーズのうち1試合を「NHK杯」とし、全日本選抜の廃会もこれで決定することになる。

スタディオンは4月に
静岡、岐阜などで5戦

日本協会では、デンマークの強豪「スタディオン・スポーツクラブ」（男子）の来日（3月30日〜4月11日）について準備を進めていたが、このほど対戦チームと開催地が次のように決まった。

デンマークチームの来日は史上初めて。京都ではナショナルチームが対戦の予定だ。正式な日程は2月初旬に決まる。

▽対戦チーム、静岡教員団（静岡）二和家具（岐阜）、大同製鋼（愛知）、対戦チーム未定（大阪）、全日本又は地元単独（京都）

三重で高校女子総合々宿
全国からの参加呼びかけ

昨春、都道府県協会主催では初めての総合強化合宿として注目をあびた三重協会の「高校女子総合合宿」が、ことしも3月25日から4月3日まで四日市市で開かれることになり、同協会はその実施要項を発表、全国各地からの参加を呼びかけている。

合宿は、参加校同士の練習マッチや、地元実業団・田村紡（全日本2位）との対戦など実戦を中心に進められ、随時、技術講習会なども予定。タイプの違ったチームと数多く対戦できることを狙いにしたユニークなトレーニング・キャンプといえる。

○……第2回高校女子総合合宿要項……○

一、期日　3月25日正午〜4月3日15時　一、会場　三重県立四日市高校（4〜6面）　一、宿舎　四日市高校々舎内及び田村紡合宿所　一、参加資格　高校女子に限る。一、経費　一日3食一人千二百八十円。一、申しこみ及び連絡・問い合せ先　三重県四日市市富田4丁目1の43・三重県立四日市高校、梶川佳孝（電話 0593—65—8221）申しこみは2月末日まで受けつける。

国際オリンピックアカデミーの受講生募集

日本体協は、IOC（国際オリンピック委員会）の指導のもとにギリシア・オリンピック委員会が主催する国際オリンピックアカデミーの第14次セッションの受講生を募集するため、各競技団体に通達した。日本ハンドボール協会の推せん希望者は2月15日までに日本協会あて連絡（文書）して下さい。

募集要項　▽名称　国際オリンピックアカデミー第14次セッション　▽会期　49年7月19日〜8月3日　▽場所　ギリシアオリンピア　▽募集人員　6名　▽資格　(1)体協加盟団体、体育系大学ならびに体育研究機関から推せんされた者　(2)推せん団体の活動に永く寄与できるコーチ、トレーナーあるいは職員、学生（競技経験者が望ましい）(3)英、仏、ギリシア語のいずれかで日常会話ができ、その理解力（テキスト）について自信のある者　▽経費　全額個人負担＝(1)アテネまでの往復旅費及び旅券代など渡航準備費　(2)会期中1人1日12USドル　(3)現地個人雑費

大同製鋼に スポーツ賞　日本協会は恒例の第23回日本スポーツ賞（読売新聞社制定）部門賞に今シーズン4大タイトルを独占した大同製鋼（愛知）を推せんした。

2月10日に全国会議

日本協会は2月10日(日)午前10時から全国理事会を、同日午後2時から定期全国評議員会を、いずれも東京・岸記念体育会館で開くことに決めた。

☆★☆★☆★☆
海外トピックス

杉山　茂
（NHK運動部）

世界選手権（2月28日〜3月10日、東ドイツ11都市）が近づき、がぜん男子の交流が活溌の欧州球界だが、今月は恒例の東欧3大トーナメントの結果を中心にまとめておいた。なお、世界選手権の各地域（大陸）予選の結果は、本誌5頁を参照されたい。

ルーマニアに栄冠
〜カルパティアカップ〜

カルパティアマウンテンカップ・トーナメントは、11月末、クルージュ（ルーマニア）に5ケ国6チームが参加、リーグ戦で行われた。

来春の世界選手権の優勝候補にあげられる各国とあって、各試合とも激戦となり、連日つめかけたファンをエキサイトさせた。結局、ルーマニアとユーゴが同勝ち点となり得失点差の争いからルーマニアが優勝と決まった。ユーゴは、プリバニッチ、ポポビッチが軍籍にあり、ラザレビッチは負傷で、この遠征には参加しなかった。

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
デンマーク	24	13−10	11−8	18	東ドイツ
ルーマニア	20	8−7	12−12	19	ルーマニアB
ユーゴ	25	15−9	10−11	20	ソビエト
ユーゴ	20	9−8	11−12	20	東ドイツ
ソビエト	23	15−6	8−8	14	ルーマニアB
ルーマニア	23	10−7	13−7	14	デンマーク
ルーマニア	21	10−11	11−9	20	東ドイツ
ユーゴ	22	10−7	12−11	18	ルーマニアB
ソビエト	23	13−5	10−8	13	デンマーク
東ドイツ	22	7−8	15−7	15	ルーマニアB
ルーマニア	24	12−6	12−8	14	ソビエト
ユーゴ	17	8−10	9−7	17	デンマーク
ルーマニアB	23	9−11	14−9	20	デンマーク
ソビエト	21	14−10	7−6	16	東ドイツ
ユーゴ	14	3−6	11−7	13	ルーマニア

【順位】①ルーマニア4勝1敗（得失点差20）②ユーゴ3勝2分(10)③ソビエト④東ドイツ・デンマーク⑨ルーマニアB

ソビエトが全勝優勝
〜トビリシ国際〜

ジョルジア共和国（ソビエト）の恒例行事、トビリシ国際トーナメントは12月、トビリシ市を中心に6チームが出場してリーグ戦で行われ、ソビエトが各試合とも前半で優位に立ち全勝、シュミットを再びエースに押し立てた西ドイツが2位に入り注目された。

ユーゴは、主力が欠けパッとした試合ぶりではなかった。

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
ソビエト	26	13−10	13−9	19	ソビエトジュニア
西ドイツ	20	11−7	9−9	16	ルーマニアジュニア
ユーゴ	28	14−6	14−14	20	ジョルジア
ソビエト	22	9−8	13−8	16	ユーゴ
ルーマニアジュニア	18	10−6	8−9	15	ジョルジア
西ドイツ	27	15−6	12−7	13	ソビエトジュニア
西ドイツ	18	9−7	9−8	15	ユーゴ
ソビエト	23	14−9	9−4	13	ジョルジア
ルーマニアジュニア	18	10−6	8−9	15	ソビエトジュニア
ソビエト	19	8−8	11−7	15	西ドイツ
ユーゴ	31	15−14	16−11	25	ルーマニアジュニア
ジョルジア	17	6−8	11−9	17	ソビエトジュニア
西ドイツ	32	17−4	15−10	14	ジョルジア
ソビエト	27	12−13	15−11	24	ルーマニアジュニア
ユーゴ	25	14−6	11−13	19	ソビエトジュニア

【順位】①ソビエト5勝②西ドイツ③ユーゴ④ルーマニア⑤ジョルジア・ソビエトジュニア

東ドイツは地元で快勝

〝クリスマストーナメント〟とも呼ばれる恒例の東ドイツ国際大会は12月18日から5日間ベルリンなどで5ケ国6チームが参加して行われた。世界選手権を狙う東ドイツがベストメンバーを揃え、カルパティアカップ（前掲）とは見違えるような攻守で、強国をなぎたおし優勝を飾った。

チーム	得点	前半	後半	得点	チーム
東ドイツ	35	20−8	15−6	14	アイスランド
ルーマニア	19	12−5	7−9	14	東ドイツB
チェコ	18	8−9	10−7	16	ハンガリー
東ドイツ	23	9−10	14−8	18	東ドイツB
ルーマニア	20	7−6	13−12	18	ハンガリー
チェコ	21	12−9	9−12	21	アイスランド
東ドイツ	21	12−8	9−7	15	ハンガリー
東ドイツB	26	10−9	16−13	22	アイスランド
ルーマニア	19	10−6	9−11	17	チェコ

東ドイツ 16（7−7、9−7）14 チェコ
ルーマニア 21（8−8、13−12）20 アイスランド
ハンガリー 15（6−7、9−7）14 東ドイツB
東ドイツ 20（12−7、8−6）13 ルーマニア
チェコ 19（7−8、12−7）15 東ドイツB
ハンガリー 24（14−11、10−10）21 アイスランド
【順低】①東ドイツ5戦全勝②ルーマニア③チェコ④ハンガリー⑤東ドイツB⑥アイスランド

ハンガリー地力を示す
～ウィーン国際大会～

ヨーロッパの中堅4国を集めたウィーン国際トーナメントは、11月行われ、ハンガリーが、世界選手権シード国の地力を示して優勝

ハンガリー 36−10 ベルギー
オランダ 10−8 オーストリア
オーストリア 17−14 ベルギー
ハンガリー 17−12 オランダ
オランダ 14−9 ベルギー
ハンガリー 19−10 オーストリア
【順位】①ハンガリー②オランダ③オーストリア④ベルギー

ソビエト、自信の優勝
～ウクライナ女子国際～

世界選手権前の大会だが、11月ウクライナで行われた女子のビッグトーナメントの結果をお知らせしよう。

参加したのは5ケ国6チームでソビエト、東ドイツが同勝ち点（8）で並び、得失点差の争いから わずかにソビエトが優り、首位となった。ルーマニアはこの大会も勝ちこせず苦しい試合ぶりで、3週後の世界選手権で準優勝することを予想した人は少かった。

ソビエト 9（3−3、6−3）6 西ドイツ
東ドイツ 10（4−7、6−3）10 デンマーク
ソビエトB 19（11−6、7−7）13 ルーマニア
デンマーク 11（6−4、5−4）8 西ドイツ
東ドイツ 18（7−5、11−7）12 ソビエトB
ソビエト 7（4−4、3−0）4 ルーマニア
東ドイツ 21（10−6、11−6）12 西ドイツ
ソビエト 18（14−3、4−7）10 ソビエトB
ルーマニア 12（6−7、6−3）10 デンマーク
ソビエトB 14（7−8、7−5）13 西ドイツ
東ドイツ 15（8−7、7−8）15 ルーマニア
ソビエト 17（9−5、8−5）10 デンマーク
ルーマニア 12（7−5、5−5）10 西ドイツ
デンマーク 15（4−8、11−5）13 ソビエトB
東ドイツ 11（6−3、5−6）9 ソビエト
【順位】①ソビエト4勝1敗（得失点差19）②東ドイツ3勝2分（17）③デンマーク・ルーマニア⑤ソビエトB⑥西ドイツ

スウェーデン北米遠征　スウェーデン男子は12月上旬、北米遠征を行い、アメリカに20−13、27−17で連勝、カナダにも30−14で大勝した。カナダの消息を得たのは久しぶりのこと。

ザグメスター仏へ　かつてユーゴのエースとして活躍、世界選手権（昭45、パリ）で日本を苦しめたZ・ザグメスター（30才198cm、90K）はこのほどフランス1部リーグ「FC・ミュルーズ」に加わり、11月なかばから登場、毎試合5～7点をかせいで、健在ぶりを示している。

ヨーロッパカップ

グンメルスバッハ準決勝へ
スタジオンは敗退

9月なかばから行われている第14回ヨーロッパカップは、旧年内に準々決勝が終了、2連勝を狙うMAIモスクワ（ソビエト）、王座奪還に燃えるグンメルスバッハ（西ドイツ）、北欧の新星オプサル・オスロ（ノルウェー）〝赤い星〟の異名をもつ初出場のセルベナ・ブラチスラパ（チェコ）の4強が勝ちあがった。

これまでのうち、波乱がおきたのはエンポール・ロストック（東ドイツ）がチェスカ（ソビエト）に第1戦18−16でとりながら、第2戦を15−19で落として敗退したことだろう。

チェスカはグンメルスバッハに14−22、19−18だったが、このチームの活躍は序盤のハイライトである。このほか、4月来日が確定したスタディオン・コペンハーゲン（デンマーク）は、アルスラナジッチ、ポポビッチらのボラック・バンヤルカ（ユーゴ）に第2戦19−16で勝ったものの、第1戦の10点差（10−20）がたたって敗退した。イスラエルから参加しているハポエル・ヘルズリアは1回戦でCF・バルセロナ（スペイン）に16−32、23−29で敗れている。

今シーズンもホーム・アンド・アウエイの明暗があまりにもはっきりしており準決勝（カード未発表）は予断を許さない。

一方、女子（第13回）は史上最高の17ケ国が参加して、世界選手権明けを待ち開幕、緒戦のHK・ボランジェ（スウエーデン）×メディナ・ギプスコア（スペイン）は10−3でボランジェが勝った。

優勝争いは、相変らずスパルタ・キエフ（ソビエト）、SC・ブダペスト（ハンガリー）、ラドニッキベオグラード（ユーゴ）、SC・ライプチヒ（東ドイツ）、ブカレスト大学（ルーマニア）、オデバ・フローベック（チェコ）ら東欧勢によるものとみられ、特に連勝目指すキエフの試合ぶりが焦点である。

「強化部」「指導体系」設定急げ

～日本のハンドボール確立のために～

宇津野年一

競技面の課題未解決

日本協会は昭和48、49年の協会新機構を昨年2月10日に決定し、去る4月新役員でスタートした。

このことについては、全国すべてのハンドボールマンが祝福し、日本ハンドボール界の発展を願って今日に至っている。

その後、一部人事の入れ替えが行なわれたが、まずはスムーズな会務処理がなされ、国内恒例のビッグゲームや国際交流によるレベルアップも軌道に乗って進められていると思う。

しかしながら、競技に欠かせない審判技術の向上と充実の問題、競技力の向上、特に指導者層の強化の問題などの解決のための努力については、必しも満足できる状態にあるとは考えられない。

これら重要な問題の討議の結果が、おうおうにして経費問題が絡み、その責任を〝金銭〟にすりかえているやにも感じられる。

私は、われわれアマチュアとしてハンドボールを愛好するものとしては、常にある一定期間、奉仕的、献身的努力をもってハンドボール界を盛りあげ、先ずは軌道に乗せ、その軌道を突走ることによって自立体制を確立することが大切だと考えている。

その意味で、常に問題となる全日本の監督、コーチの人選に一言訴えたいと思いペンを走らせることをお許し願いたい。その前にお断りいたしたいことは、私は、昭和46年第4回世界女子選手権大会のコーチを任命されながら、勉強不足のため、その責を果し得なかったことを深く反省し、お詫び申しあげ、このような立場にありながら問題提起をすることは、大変心苦しいのであるが日本ハンドボール界の発展を願って次のような提案をしたいと思う。

一貫しない指導陣の選出

全日本の監督、コーチは言うまでもなく理論と実技に精通し、日本を知り、世界に通ずる者が当るべきであって、自己の機能を十分に発揮し、遂行することは論を待たないが、指導の骨子は「日本のハンドボール」であって、唯単なる模倣ではならないと思う。

過去の監督、コーチのあり方が間違っていたとは思わないし、むしろ立派であったと思っているが反面、果して「日本のハンドボール」が追究されていたであろうか。この点に疑念を抱かざるを得ない。

では何故こうなったのであろうか。それは監督、コーチの選出が一貫されていないということにつきるし、その体制ができていなかったといえるのではないだろうか。

こう考えるのは、私以外にも数多くおられるでしょう。

「日本のハンドボール」を追求するためには、それなりの研究討議がなさなければならないし、当然、討議機関が設置されていなければならないと考える。

頂点強化に討議の場を

私はこれらの問題については、技術部の中に強化部（仮称）を組織し（現機構では3部に関連する強化委員会はある＝機関誌106号3頁）、その中に男子強化部、女子強化部を設け、その委員が許される範囲内で数多くの研究討議の場を持ち、日本を見つめ、世界を知って、「日本のハンドボール」の確立に努めそこから、技術体系と指導体系をつくりあげることが第一であると考える。

もちろん強化委員は、全国津々浦々から、過去・現在・将来を含めて有能な人材を抜擢し、その委員の中から全日本の監督、コーチを選出すれば、多くの協力を得られ、「日本のハンドボール」を遂行できるし、さらに個人の才腕を十二分に発揮することも可能となる。

過去その任につかれた方々は少なくとも自分のハンドボールの域内で任務の遂行に鋭意努力されたことと思う。

成功して当然、失敗でもしようものなら酷評をうける。これがハンドボール界の〝常道〟であったように見られていたが、この成り行きは、ハンドボールの見方の相違に主たる原因が潜んでいるように思う。

現在では、その声は消えかかっているが、日本のハンドボールはかつて関東流だ、関西流だといわれ、さらには日体流、芝浦流、立教流だなどとささやかれたことを記憶しているが、私はそれはそれなりに意義があり、貴重だと思っていたが、こと全日本に関しては○○流、××流などというのは当て嵌まらないと思う。

異なった畑で育った選手が、短期間で満足できる全日本に育成することはむずかしいことである。

- 普及指導部
- 審判部
- 技術部
  - 男子強化部（委員5名）
  - 女子強化部（委員5名）

ハンドボールマンが、全日本の監督、コーチをあげて支援することは言うまでもないことであるが私はそれ以前の問題として、監督コーチとしての人材を、どこで、どのようにして研鑽してもらうかが大問題であると思う。この解決の道として、今、協会の英断により、強化部の組織化と人選を急いでもらいたい。現在の協会機構で、各部の業務内容を明確にし、相互の密なる連絡も必要であると思う。この意味から日本のハンドボール技術の向上に一役買うのが、時代の流れに遅れない正しい審判の判定であると考える。

審判部の技術見解と、技術部の技術見解の統一を図ってもらいたいと願うものである。審判員が選手の技術の向上に一役買っていることは明瞭であり、そのための努力は当然であると思う。

現在、審判部においては、前向きの姿勢で努力を願っているが、さらに横との連絡において一層の努力を願う次第である。

なお、強化部(仮称)の機構私案は別掲のとおりである。（投稿）

海上自衛隊の全国大会　佐世保

第2回海上自衛隊全国大会が2月14日から16日までの3日間長崎・佐世保市立体育館で行われる。10年ほど前、海上自衛隊の体育訓練としてハンドボールが採用されて以来、着実にその芽は伸び、去年から異色の全国大会発足となった。今年は23チームの参加が予定されている。

田村幸雄氏（千葉、第4航空群）からの〝情報〟をもとに大会の話題を探ってみた。

○……昨年、一昨年と2年つづけて海上勢が全日本自衛隊選手権の優勝を飾り、ハンドボール熱はいっそうかき立てられている。

それにつれて全般のレベルは急速に高まっており、特にこの大会でも有力な優勝候補にあげられている第一航空群（鹿児島）、佐世保地方隊（長崎）、第四航空群（千葉）などは、国体などでも一般、実業団と互角に亘りあっており、そのチーム力は相当なものだ。

○……艦船部隊よりも、航空部隊の方がやや優勢なのは、練習環境などによるものだろうが、舞鶴地方隊（京都）のように、この大会を目指して、早くからトレーニングを積んでいる艦船チームもあり今年あたりは、一波乱おきそうな気配である。

○……同一基地内から別々のチームが出るのも自衛隊球界の特色。

なかでも第三術科校（今年度全日本自衛隊選手権優勝）と第四航空群は、昨年来、千葉県内の宿敵同士だし大湊地方隊と第二航空群はともに青森にあって、3年後の地元国体を目指しているチーム。

また徳島教育航空群は、なんと三空群（徳島）と宇都宮教空（栃木、前回2位）の寄合いという。

○……チームによっては、この大会のため、他のスポーツから選手を〝調達〟してくるところもあるし第二一航空群（千葉）のように主力の得丸、小森が南極に行っているのでそのマイナスが痛いといった話も伝えられてくる。中水流（第一航空群）、平野（第四航空群）ら全日本級の選手も輩出しており、個人技の充実も楽しみの一つ。いつのまにか育って来た海上自衛隊のハンドボール界だが、その陰には小月教育航空群（山口）のように多くの選手、指導者を全国へ送り出した部隊の功績も見逃せない。

〔参加チーム〕横須賀、呉、佐世保、舞鶴、大湊各地方隊、第一、第二第四、第二一、第三一各航空群、第一、第二、第三、第四各護衛隊群、鹿屋、徳島、小月各教育航空群、第一、第三各術科校、第一、第二各掃海隊群、潜水隊群練習艦隊。

湧永薬品、順当の優勝　近畿実業団

各地の記録

第3回近畿実業団選手権は昨年10月29日から4日間、大阪・東淀川体育館に5チームが参加、リーグ戦で行われ、湧永薬品（大阪）が順当勝ちした。（＝男子のみ）

大山商会（大阪）30（21−1、9−1）2 美津濃（大阪）
神戸製鋼所（兵庫）20（11−6、9−4）10 大阪ガス（大阪）
湧永薬品（大阪）18（10−6、8−6）12 大山商会
大阪ガス 24（14−4、10−8）12 美津濃
神戸製鋼所 6（3−2、3−1）3 大山商会
湧永薬品 28（11−9、17−2）11 大阪ガス
神戸製鋼所 26（15−3、11−5）8 美津濃
湧永薬品 25（8−4、17−2）6 美津濃
大山商会 22（13−2、9−5）7 大阪ガス
湧永薬品 22（11−7、11−4）11 神戸製鋼所

【順位】①湧永薬品4戦全勝②神戸製鋼所3勝1敗③大山商会2勝2敗④大阪ガス⑤美津濃

東京重機の4連勝成らず

トップチームがこぞって参加する恒例の第11回東京都選手権は11月3日から18日までの4日間、東京重機ハンドボール場に男31、女11チームが参加して開かれた。

男子は1回戦で芝浦工大が神代クに延長で敗れたのをはじめ、三景、法大などが次々と脱落、2連勝を狙う大崎電気も日体大に押し切られ、結局、中大が決勝で日体大に逆転勝ち初優勝を飾った。

女子も、全日本学生2位の東京教大が東花ク（関東クラブ1位）に敗れるなどしたが、予想どおり実業団勢が強く、日本ビクターが東京重機の4連覇を阻んで初優勝した。

▽男子準々決勝
大崎電気 29（11−5、18−4）9 慶大
日体大 19（9−3、10−4）7 日大
東京教員 27（13−6、14−5）11 全日体
中大 19（9−3、10−4）7 明星ク
▽同準決勝
日体大 16（9−4、7−11）15 大崎電気
中大 21（11−4、10−10）14 東京教員
▽同決勝
中大 12（6−3、6−8）11 日体大
▽女子準々決勝
東京重機 17（8−5、9−3）8 日体大
東京学芸大 15（6−4、9−2）6 美和ク
大崎電気 20（10−4、10−3）7 かなんク
日本ビクター 14（5−1、9−2）3 東花ク
▽同準決勝
東京重機 20（11−2、9−2）4 東京学芸大
日本ビクター 11（7−4、4−5）9 大崎電気
▽同決勝
日本ビクター 8（5−3、3−3）6 東京重機

室蘭ク、男女で優勝

第13回北海道（全道）室内選手権は12月22、23日の両日室蘭市体育館に男子18、女子6チームが参加。男子は4連覇を狙う北大を大激戦の末に破った室蘭クが決勝で相手・函館有斗OBの棄権から労せずして初優勝。

女子も波乱ぶくみだったが、室蘭クBが函館女商OGに大勝、栄冠を飾った。

▽男子準々決勝
北大 13−9 室蘭東OB
室蘭ク 28−19 登別ク
函館有斗OB 35−12 函館商門ク
北大OB 19−13 函館有斗OB・B
▽同準決勝
室蘭ク 18−15 北大
函館有斗OB 25−15 北大OB
▽同決勝
室蘭ク 棄権 函館有斗OB
▽女子1回戦（2試合）
室蘭東OG 8−7 室蘭ク
室蘭クB 18−13 旭川教大
▽同準決勝
室蘭クB 15−4 室蘭東OG
函館女商OG 12−3 函館商門ク
▽同決勝
室蘭クB 10（4−3、6−2）5 函館女商OG

沖縄教員が優勝

▼第7回沖縄県総合選手権（11月・南部商）
▽男子準決勝
沖縄教員 26−13 ひまわりク
那覇商OB 17−14 興南イーグルス
▽同決勝
沖縄教員 18（8−6、10−8）14 那覇商OB
▽女子準決勝
興南高 5−1 浦添高
小禄高 14−3 豊見城高
▽同決勝
小禄高 11（6−2、5−2）4 興南高

東京重機、男子は好調

▼第3回東京都クラブ・リーグ（11月・東京重機球技場ほか）
▽男子決勝トーナメント1回戦
L・B・C 9−6 育英
育英B 棄権 S・D・P
若木会 棄権 松門会
重機愛好会 18−14 関東OB
▽同準決勝
L・B・C 13−12 若木会
重機愛好会 15−8 育英B
▽同3位決定戦
育英B 11−10 若木会
▽同決勝
重機愛好会 15−7 L・B・C
▽女子リーグ順位①東花ク・美和ク＝両者優勝③東京学芸大OG

高校新人戦は神代と小平

▼東京都高校秋季大会（新人戦）
▽男子準々決勝
中大付 13−7 日体荏原
明星 13−6 明正
神代 20−8 化学工業
国立 4−3 杉並
▽同準決勝
中大付 10−6 明星
神代 12−6 国立
▽同3位決定戦
国立 10−5 明星
▽同決勝
神代 13−10 中大付
▽女子準々決勝
小平 5−1 石神井
五商 11−4 南
小岩 8−3 池袋商
白鴎 4−2 二商
▽同準決勝
小平 8−5 五商
小岩 13−2 白鴎
▽同3位決定戦
五商 7−1 白鴎
▽同決勝
小平 10−8 小岩

御坊商工、男女揃って勝つ

▼和歌山県高校新人大会（11月・新宮高）

▽男子決勝リーグ
御坊商工 6—3 那賀
那賀 10—8 市和歌山商
御坊商工 5—2 市和歌山商
御坊商工は2度目の優勝
▽女子決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）
県和歌山商 6—4 粉河
御坊商工 10—2 笠田
▽同決勝
御坊商工 10（4—3、3—4、0—0、3—0）7 県和歌山商
御坊商工は初優勝

三春台ク、春秋連覇成る

▼神奈川県一般男子秋季選手権（11月・桐蔭学園）
▽準々決勝
三春台ク 26—7 北陵ク
神奈川教員団 25—18 日本発条
法工ク 20—13 蒔田クB
セントラル自動車 19—8 立野ク
▽準決勝
三春台ク 18—6 法工ク
セントラル自動車 13—12 神奈川教員団
▽決勝
三春台ク 16（8—6、8—3）9 セントラル自動車

明倫、延長で市川崎制す

▼神奈川県高校新人戦（11月・東高）
▽男子準々決勝
多摩 16—8 鎌倉学園
一商 14（延）13 希望ケ丘
慶応 9—5 相模原
横浜商 10—9 逗子
▽同準決勝
多摩 10—4 一商
慶応 没収試合 横浜商
▽同決勝
慶応 13（5—0、8—1）1 多摩
▽女子準々決勝
明倫 13—5 京浜横浜
東 3—2 県商工
市川崎 9—2 高津
立野 8—3 川和
▽同準決勝
明倫 13—2 東
市川崎 9—4 立野
▽同決勝
明倫 5（1—2、2—1、1—0、1—0）3 市川崎
（注）男子1回戦で慶応55—3市立横須賀工（前半25—2）という高校界ではめずらしい大量得点がマークされた。

男子で新進校目立つ

▼大阪府高校新人戦（11月・初芝高ほか）
▽男子準々決勝
佐野工 13—5 八尾
上の宮 10（分）10 堺工
7MTコンテストで上の宮の勝ち
鳳 12（分）12 初芝
7MTコンテストで鳳の勝ち
摂津 11（分）11 寝屋川
7MTコンテストで摂津の勝ち
▽同準決勝
佐野工 9—7 摂津
上の宮 8—7 鳳
▽同決勝
佐野工 8（5—2、3—5）7 上の宮
▽女子準々決勝
和泉 7—5 箕面
大谷 9—2 春日丘
枚方 棄権 女短大付
住吉学園 8—5 天王寺
▽同準決勝
大谷 11—0 枚方
住吉学園 9—5 和泉
▽同決勝
大谷 13（9—3、4—0）3 住吉学園

日新、三菱レに逆転勝ち

▼第9回広島県秋季選手権（11月呉商高）＝男子のみ
▽準々決勝
日新製鋼呉 15—14 広島教職員
呉高専 9—6 近大呉工学部
広島大 11—8 呉商ク
三菱レ大竹 記録不明 修道大B
▽準決勝
日新製鋼呉 23—9 呉高専
三菱レ大竹 19—15 広島大
▽決勝
日新製鋼呉 13（6—8、7—2）10 三菱レイヨン大竹

教員クが王座につく

▼第16回岩手県総合室内選手権（1月・岩手県体育館）
▽男子・一般の部1回戦（2試合）
白亜ク 21—12 花巻ク
岩手大 21—8 一関高専
▽同準決勝
岩手教員ク 19—17 白亜ク
盛岡商友会 15—9 岩手大
▽同決勝
岩手教員ク 14（7—3、7—6）9 盛岡商友会
▽同・高校の部準々決勝
盛岡商 28—3 一関工
盛岡一 13—11 水沢
花巻農 10—7 生活学園
盛岡四 7（延）6 花巻北
▽同準決勝
盛岡商 17—8 盛岡一
花巻農 11—9 盛岡四
▽同決勝
盛岡商 13（5—2、8—0）2 花巻農
▽男子王座決定戦
岩手教員ク（一般）13（5—2、8—6）8 盛岡商（高校）
▽女子（高校）準々決勝
岩手女 9—2 花巻農
花巻北 7—1 黒沢尻南
平舘 7—5 大原商
花巻南 3—2 盛岡二
▽同準決勝
岩手女 7—3 花巻北
花巻南 6（延）3 平舘
▽同決勝
花巻南 8（3—1、5—1）2 岩手女

田村紡OG、元気な準優勝

▼第24回三重県総合選手権（兼第8回日沖杯争奪トーナメント）（11月・津女高）
▽男子準々決勝
本田技研 20—10 鵜の森ク
本田技研B 28—9 明野航空隊
本田技研C 12—11 四日市工高
三菱油化 24—19 久居自衛隊
▽同準々決勝
本田技研 27—20 本田技研C
本田技研B 17—9 三菱油化
▽同決勝
本田技研 22—7 本田技研B
▽女子準々決勝
田村紡 20—1 上野商高
津女高ク 8—2 菰野高
津女高 8—7 暁高ク
田村紡OG 12—0 暁高
▽同準決勝
田村紡 21—6 津女高ク
田村紡OG 11—4 津女高
▽同決勝
田村紡 10—3 田村紡OG

激戦の末、教員が初優勝

▼第10回宮崎県総合選手権（11月西都市）
▽男子準々決勝
宮崎大 14—9 日向工高
宮崎教員 25—15 都城商高
泉丘会 27—9 宮崎工高
宮崎ク 19—16 日南工高
▽同準決勝
宮崎教員 19—10 宮崎大

泉丘会 21—17 宮崎ク
▽同決勝
宮崎教員 25（8—10 13—11 …… 2—2 2—1）24 泉丘会
▽女子1回戦（3試合）
都城西高 10—3 延岡高
泉ケ丘高 8—7 西都商高
小林商高 17—3 都城西高B
▽同準決勝
泉ケ丘高 15—8 都城西高
小林商高 棄権 宮崎女高
▽同決勝
泉ケ丘高 10（6—3 1—4 …… 2—2 1—0）9 小林商高

男女ともいぜん三本松

▼香川県高校新人大会（11月・高松工芸高）
▽男子準々決勝
高松一 31—0 高松南
三本松 20—7 多度津工
坂出工 15—6 尽誠学園
丸亀 15（分）15 高松東
抽せんで丸亀高の勝ち
▽同準決勝
三本松 9—7 高松一
坂出工 14—6 丸亀
▽同決勝
三本松 10（4—6 6—3）9 坂出工
▽女子1回戦（1試合）
女子商 6—2 高松
▽同準決勝
三本松 13—3 高松南
高松一 3—2 女子商
▽同決勝
三本松 17（7—1 10—0）1 高松一

男子で福井商初の栄冠

▼福井県高校新人大会（11月・敦賀市立体育館）
▽男子予選リーグA組順位①福井商②北陸③武生商④羽水
▽同B組順位①若狭②高志③敦賀工④藤島
▽同決勝トーナメント1回戦
福井商 15—7 高志
若狭 18—14 北陸
▽同決勝
福井商 21（12—7 9—0）7 若狭
福井商は初優勝
▽女子予選リーグA組順位①羽水②福井商③高志
▽同B組順位①武生商②藤島③若狭
▽同決勝トーナメント1回戦
羽水 11—5 藤島
武生商 14—0 福井商
▽同決勝
羽水 6（2—2 4—1）3 武生商
羽水高は2年連続優勝

女子は一女商抜群

▼広島県高校新人戦（11月・広高）
▽男子準々決勝
呉工 11—10 広
宮原 12—9 三次
修道 10（延）9 山陽
盈進 15—11 呉港
▽同準決勝
呉工 16—8 宮原
修道 17—8 盈進
▽同決勝
修道 12（5—3 7—7）10 呉工
▽女子1回戦（2試合）
広島一女商 8—2 山陽女
豊栄 5—3 宮原
▽同準決勝
広島一女商 18—1 呉商
進徳 11—0 豊栄
▽同決勝
広島一女商 15（5—0 10—1）1 進徳

四日市工と津女勝つ

▼第1回三重県高校秋季大会（11月・亀山高）
▽男子準々決勝
四日市工 18—6 津工
四日市中央工 13—6 尾鷲
高田 24—7 海星
津 20—7 四日市
▽同準決勝
四日市工 15—6 四日市中央工
高田 12—4 津
▽同決勝
四日市工 20（8—2 12—2）4 高田
▽女子準々決勝
四日市 20—0 松阪女
亀山 13—1 菰野
津女子 19—0 白山
暁 9—2 上野商
▽同準決勝
四日市 10—3 亀山
津女子 11—4 暁
▽同決勝
津女子 10—3 四日市

中学大会記録

◇熊本・県中体連大会ハンドボール競技（11月・松橋中）参加男＝11、女＝8
▽男子決勝トーナメント1回戦
玉南 10—9 鏡
松橋 12—10 帯山
▽同準決勝
玉南 10（延）9 人吉一
松橋 14—4 牛深
▽同決勝
人吉一 8（4—5 2—1 …… 0—2 2—0）8 松崎
引き分け
（注）両校優勝
▽女子決勝トーナメント1回戦（＝準決勝）
氷川 7—5 本渡
玉南 11—5 松橋
▽同決勝
氷川 9（6—5 7—4）9 玉南

「各地の記録」への寄稿は大会終了後2週間以内に編集部あてお送り下さい。（用紙自由）

☆編集後記

□……日本協会を取り巻く社会情勢も、つとに厳しく、一九七四年は多難な年となりそうです。世界選手権（男子）アジア予選をめぐる執行部の苦悩はその一つのあらわれでした。

しかも、オリンピック定着により日本ハンドボール界を見る内外の目の厳しさは、これまでと比較になりません。

□……ここ数年、日本ハンドボール界は、順調な足どりで成長を遂げてきました。

「田村・荒川体制」にとって初めて迎える試錬の年ということもできそうです。

これまでに貯えた地力を今こそ発揮して、この難関を突破しなければなりません。

□……物資事情の激動は本誌の刊行にも、暗雲をのぞかせはじめています。

印刷を引きうけて下さる高橋活版（学術社）のご配意である程度までの見通しはたっていますが、楽観は許せません。読者各位のご協力、ご理解をお願いすることもありそうです。

□……ことしも積極的な寄稿を期待しています。球界（協会）論、リポート、ニュース、記録等々。技術論、球史の発掘を特に歓迎します。（杉）

■ジューキミシンは精密工学の結晶とうたわれる高級品。シャープなスタイリングで、その名を高めています。

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第一一六号
昭和四十年六月七日
第三種郵便物認可
昭和四十九年一月二十五日印刷
昭和四十九年二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区神南一ー一ー一
電話 大代表(467)三一一一
振替 東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価 二百円
(年間購読料 千八百円)